

平成 24 年度 千代田学
「千代田区における教育支援員の育成に関する実践研究」
成果報告書

平成 25 年 3 月

大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター

目 次

1	はじめに	5
2	事業の概要	6
3	事業の実施体制	8
4	実施した事業内容	9
	(1) 特別支援教育支援員育成プログラム	
	(2) 理科支援員育成プログラム	
	(3) 野外活動支援員育成プログラム	
5	応募・受講者	10
6	受講者の評価	11
	(1) 特別支援教育支援員育成プログラム	
	(2) 理科支援員育成プログラム	
	(3) 野外活動支援員育成プログラム	
7	事業評価（外部評価）	36
	(1) 事業の運営	
	(2) 特別支援教育支援員育成プログラム	
	(3) 理科支援員育成プログラム	
	(4) 野外活動支援員育成プログラム	
8	本事業のまとめ（内部評価）	37
	(1) 特別支援教育補助員育成プログラム	
	(2) 理科支援員育成プログラム	
	(3) 野外活動支援員育成プログラム	
9	おわりに	42

1 はじめに

千代田学「千代田区における教育支援員の育成に関する実践研究」は、千代田区における幼稚園・小学校の教育支援員の不足をカバーするために、大妻女子大学家政学部児童臨床研究センターと千代田区教育委員会が協力して、特別支援教育支援員、理科支援員および野外活動支援員という3つの教育支援員を育成するための有効な研修の在り方について、実践を基にしながら開発していくことを目的として取り組まれました。平成24年度で3年間を要しました。3年間のそれぞれのプログラムの実践とその年度ごとの振り返り（外部評価）を経て年々充実してきています。本年度をもって、千代田学としての研究は一区切りがつかしました。このような充実した研究：教育支援員の育成プログラムの一応の完成をみることができました。

これは、千代田学としては異例ともいえる3年間にわたる採択を得ることができたからと千代田区教育委員会の関係者の皆さまの本研究に対するご支援の賜物と考えています。

受講者数も年々増加の一途をたどり、以下のように募集人数をはるかに上回る応募者でした。

特別支援員育成プログラム	募集人数 20名	参加人数 59名
理科支援員育成プログラム	募集人数 20名	参加人数 33名
野外活動支援員育成プログラム	募集人数 20名	参加人数 18名

参加者は野外活動支援員育成プログラムを除き、千代田区内の現職の皆さまにご参加いただいたことで、それぞれのプログラムに参加した本学学生は、大学に居ながらにして現場方々のプログラムに参加する態度などに触れ、多くの学びを得ることができました。また、野外活動支援員育成プログラムには、学生のみでの参加でしたが、児童学科だけではなく他学部や短期大学の学生の参加を得て、お互いに他学部、短期大学の学生との交流を通して、学生生活を広く見直す機会になったと思います。また、野外活動支援員育成プログラムと並行して、千代田区内の幼稚園・保育園での園外保育の支援などに参加し、学んだことを実際に行動し、理論と実践のつながりを体験できました。

このような取り組みの成果については、受講生のアンケート結果から大変満足のいくプログラムであったという評価を得ました。

また、本研究の外部評価委員の皆さまも3年間、本プログラムにつきあって下さり、その成長を手助けしてくださいました。よかったところと改善点をきちんと指摘してくださいました。その評価結果と受講生のアンケートに真摯に向かい合い、お忙しい業務のなか、毎年プログラムを改善して取り組んでくださった前所長であり特別支援員育成プログラムの責任者の柴崎正行先生、理科支援員育成プログラムの責任者の石井雅幸先生、野外活動支援員育成プログラムの川之上豊先生には、心よりお礼を申し上げます。

最後になりましたが、学内の関係者やスタッフのみならず、そしてご協力いただきました千代田区教育委員会関係者の皆さまに厚くお礼申し上げます。

このような取り組みが千代田区内の子どもたちの生活や教育に何がしかの貢献ができましたらこれ以上の幸せはありません。

今後とも、地域の中での大学（児童臨床研究センター）の役割や、大学家政学部付属であるという学生の学びの場としての役割を模索し続けたいと考えています。ご意見をいただければ幸いです。

平成25年3月 吉日

大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター
所長 阿部 和子

2 事業の概要

(1) 名称

千代田区における教育支援員の育成に関する実践研究

(2) 趣旨

千代田区においては、幼稚園・小学校における教育支援員が不足している状況である。そこで、大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター（以下、当センター）と千代田区教育委員会が協力して、不足している特別支援教育支援員、理科支援員および野外活動支援員という3つの教育支援員を育成するための有効な研修の在り方について、実践を基にしながら開発していくことを趣旨とした。

当センターでは、平成19～21年度の3年間にわたり文部科学省から委託を受け、千代田区教育委員会と連携して「社会人の学び直しニーズ対応教育推進事業」を実践してきた。これを生かし、平成22年度は、「学生の地域活動」「社会人の学び直し」「大学の地域貢献」を目的として、現場の支援員や保育園・幼稚園・小学校から研修内容等についての調査を行い、試行的に育成を行った。さらにその翌年度には、効果的な育成方法と在り方の開発に焦点を当てて改善を行った。

今年度からは、特別支援教育支援員育成プログラムについても、これまで対象であった地域の社会人の他に、新たに大妻女子大学（以下、本学）または千代田区内大学生までも対象として加え、効果的な育成方法とその後の研修のあり方を検討した。

(3) 内容

① 特別支援教育支援員育成プログラム

現在、千代田区内で特別支援教育支援員や補助員である現職者と本学学生を対象に、全10コマから構成される特別支援教育支援員育成プログラムを実施した。講義は、特別支援教育の専門である本学教員、他大学教員、千代田区特別支援教育指導員、幼稚園教員および千代田区教育委員会職員らが担当し、机上での講義や演習だけでなく実践的内容（ディスカッション・ケース検討など）も含むことにより、基礎的知識・技術と実践力を育成し、かつ現場での実践を深め、還元できる力を育成した。

② 理科支援員育成プログラム・小学校教員対象理科研修

小・中・高等学校教諭等の資格を持っている人々及び同等な経験を有して仕事を持たない人々（学生を含む）を対象に、全16コマからなる理科支援員育成プログラムを実施した。また、今年度は東京都小学校理科教育研究会と共催で小学校理科授業づくり支援研修会を開催し、本プログラム受講生にとってさらに充実した研修の場を提供した。

講師は、大妻女子大学教員、科学館等の専門家及び都内の小学校理科担当教員であり、講義や演習だけでなく実験・実習的研修を多く含むことにより、基礎的知識・技術と実践力を育成した。

③ 野外活動支援員育成プログラム

将来、教員免許や保育士資格を取得して現場に立つ学生を中心に、教育・保育活動時の野外活動における基礎知識や基礎技能を身に付ける研修を行う野外活動支援員育成プログラムを実施した。講師は、大妻女子大学教員及び幼稚園等での現場経験者であり、講義のみでなく実際に体験をする実習的研修も含めた。

(4) 事業の期間

平成 23 年 4 月 1 日 ～ 平成 24 年 3 月 31 日

(5) 事業の実施日程

本事業は、表 1 の通りに実施された。

表 1. 事業の実施日程

日程	事業の内容
4月1日	事務局の設置
5月下旬	各プログラムの研修内容と研修講師の決定
5月中旬 ～6月上旬	各プログラム 受講生の募集
6月中旬	各プログラム 受講生の決定、受講前アンケート配布・回収
6月23日	理科支援員育成プログラム・小学校教員対象理科研修 講座開始
6月23日	野外活動支援員育成プログラム 講座開始
6月30日	特別支援教育支援員育成プログラム 講座開始
7月21日	野外活動支援員育成プログラム 講座終了、派遣活動を本格的に開始
12月1日	野外活動支援員育成プログラム 受講後アンケート回収
12月15日	特別支援教育支援員プログラム 講座終了、受講後アンケート配布・回収
2月25日	理科支援員育成プログラム 講座終了、受講後アンケート配布・回収
3月5日	外部評価委員会開催
3月30日	さくらフェスティバル発表、事業終了日

3 事業の実施体制

(1) 事務局

本プログラムの運営、研修に必要な書類の作成及び管理、講師、受講生との連絡等を実際に行う組織として、大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター内に事務局を置いた。

児童臨床研究センター所長（1名）、インテークワーカー（1名）、助手（1名）のほか、事務を取り扱う非常勤の専任スタッフ（1名）を配置した。

(2) 外部評価委員

本事業の運営・管理、プログラム内容、受講生の現場での貢献度、地域への貢献度など全体的な事業評価を行うことを目的とした外部評価委員会を、平成25年3月5日（火）14時から2時間程度行った。評価委員には、表2の通り、他大学の関係者や現場の教員などをお招きした。

表2. 外部評価委員

氏名	所属
太田 俊己	植草学園大学
角谷 重樹	国立教育政策研究所
高橋 昇	私立原釜幼稚園

(3) 各プログラム担当

特別支援教育支援員育成プログラム、理科支援員育成プログラム、野外活動支援員育成プログラムはそれぞれ、表3に示すメンバーが中心となってプログラムを開発・検討した。

表3. プログラム担当者名

プログラム名	氏名
特別支援教育支援員育成プログラム	柴崎正行・高橋ゆう子
理科支援員育成プログラム 小学校教員対象理科研修	石井雅幸・矢野博之
野外活動支援員育成プログラム	川之上豊・加藤悦雄

(全て本学教員)

(4) 関連団体との連携状況

本委託事業は、千代田区教育委員会と連携を図りながら企画・運営をしている。千代田区教育委員会とは、次のような点で連携を図ることができた。

- ①千代田区教育委員会育成指導課課長・指導主事と相談協議の上、教育委員会との相互協力のもとでプログラムを作成していった。
- ②受講者の募集において千代田区教育委員会に協力していただくことにより、地域の人々への情

報発信の体制を作ることができた。

- ③特別支援教育支援員育成プログラムでは、千代田区教委員会担当指導主事に特別支援教育支援員の役割について明確に講義していただき、また、千代田区立小学校での実践を講座内で紹介していただいた。
- ④理科支援員育成プログラムでは、次年度の千代田区内の公立小学校の理科支援員として派遣することを前提にすべての講座の内容、日程が組まれている。この日程や内容を組むにあたっては、千代田区内の公立小学校の理科担当の先生とも協議を行った。また、千代田区内にある科学技術館との連携のもとで事業を推進した。さらには、東京都小学校理科教育研究会との合同研修会の形を取る講座を2回つくることによって、現職の小学校の先生と理科支援員となることを考えている受講生との研修を通しての交流の場を設定した。
- ⑤野外活動支援員育成プログラムでは、実際に千代田区立幼稚園や保育園の野外活動に、支援員を派遣させていただいた。

4 実施した事業内容

各プログラムの内容を、以下の表4、5、6に示す。

表4. 特別支援教育支援員育成プログラム

回	講義日	時間	テーマ	内容	講師	場所
1	6月30日(土)	14時～16時	特別支援教育制度と支援員の役割について	特別支援教育の流れと仕組み、小学校ではどのような校内支援体制を作っているのか。支援員の役割は何かなどについて概説する。	磯野 智博 (千代田区教育委員会)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎A棟2階242教室
2	7月14日(土)	14時～16時	「特別な支援」の必要な子どもの理解：乳幼児期	表情や行動などの外から見えることだけでなく、気持ちにふれる共感的な理解も大事になる。どこに行き詰っているのかを感じ取り、それをどう理解していくことが基本となる。	柴崎 正行 (大妻女子大学)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階171教室
3	9月8日(土)	14時～16時	「特別な支援」の必要な子どもの理解：学童期	生活や授業においてどのような特徴を示すことがあるのか、またそうした行動の背景には、本人としてもどのような困難を抱えているのかを理解していくことが基本となる。	高橋 ゆう子 (大妻女子大学)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階171教室
4	9月15日(土)	14時～16時	学習面での支援で大事にしていきたいこと	小学校で学習活動を展開していく時に、時期により、また教科内容により、どのような支援が大事になるのかを具体的に考えてみる。	松浦 正典 (野田市立福田第二小学校)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階171教室
5	9月29日(土)	14時～16時	クラスの仲間との関係づくりで大事にしていきたいこと	支援員はその子だけに限るとは限らない、クラスの子どもたちとどうかわかることが、その子をクラスの一員として位置づけていくのかについて具体的に考えてみる。	河合 優子 (東京都教育委員会)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階171教室
6	10月13日(土)	14時～16時	生活面での支援で大事にしていきたいこと	生活指導の場面にいかかわっていくときには、個々の障がいの状態に応じて支援する必要がある。その支援の在り方を具体的に考えてみる。	太田 俊己 (植草学園大学)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階171教室
7	10月27日(土)	14時～16時	担任との連携で大事にしていきたいこと	子どもたちへの支援は、クラスの担任と連携しながら取り組んでいかななくてはならない。どのような連携の在り方が求められているのかを具体的に考えていく。	立石 晃子 (荒川区公立幼稚園)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階171教室
8	11月10日(土)	14時～16時	支援員に求められることとは	支援員に求められる事例は多岐にわたっている。その主なものを紹介しながら、支援員の果たす役割とは何かについて、考えてみたい。	石川 洋子 (千代田区特別支援教育指導員)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階171教室
9	12月8日(土)	14時～16時	事例研究 1 (保育の中での支援の実際)	幼稚園において、特別な支援を必要とする幼児の支援員をされている先生に、具体的な実践事例をお話して、何を大事にしているかを語っていただく。	柴崎 正行 (大妻女子大学) 藤澤 淳子 (所沢ひまわり幼稚園)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎A棟2階242教室
10	12月15日(土)	14時～16時	事例研究 2 (授業の中での支援の実際)	小学校において、特別な支援を必要とする児童の支援をされている先生に、その具体的な実践事例を通して、支援において何が大事になるかを語っていただく。	高橋 ゆう子 (大妻女子大学) 松浦 正典 (野田市立福田第二小学校)	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階171教室

表 5. 理科支援員育成プログラム・小学校教員対象理科研修

回	日時	テーマ	内容	講師、事業支援者	実施場所	備考
1	6月23日(土) 11:00~12:30	小学校理科の授業と理科支援の役割	理科支援員をこころざす学生を対象に実施する。小学校理科授業の目的と理科支援員の役割を講義する。	大妻女子大学 石井雅幸	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階 171教室	基本的には対象は理科支援員希望の方が参加基本
2	6月23日(土) 13:30~15:00 15:30~17:00	7月の3年から6年までの理科	3,4年 生き物単元に関連して 5,6年 顕微鏡操作	元田園調布双葉小学校 永井昭三 大妻女子大学 石井雅幸	北の丸公園(科学技術館集合) 大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階 171教室	13:30~15:00が北の丸公園での植物観察 15:30~17:00が北の丸公園からの移動中の観察並びに顕微鏡操作
3	7月24日(月) 18:00~19:30	9月の3,4年理科	3年 太陽と影の動きを調べよう 5年 受粉・結実	大妻女子大学 石井雅幸	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階 171教室	
特別	8月6日(月) 9:30~17:00	太陽や月の観察と太陽系シミュレーションの操作	4年 月と星	JAXA 佐藤毅彦 科学技術館 木村かおる 大妻女子大学 石井雅幸	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟3階 370教室	太陽系の運行をシミュレーションするソフトの操作研修と太陽た月の観察実験方法について(東京都の教員研修と共催予定)
4	8月24日(金) 18:30~20:00	9月の5,6年理科	5年 月や星の動き 6年 太陽と月の形	科学技術館 木村かおる 大妻女子大学 石井雅幸	科学技術館6階実験室と屋上	月や星の観察を科学技術館の屋上で行います
5	8月25日(土) 10:30~12:00	10月までの3,4年理科	3年 太陽の光を調べよう 風やぶらで動かそう	大妻女子大学 石井雅幸	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階 171教室	
6	8月25日(土) 13:00~14:30	10月までの5,6年理科	5年 台風と天気、流れる水の働き 6年 大地のつくりと変化	大妻女子大学 石井雅幸		
7	10月6日(土) 15:00~16:30	11月までの5,6年理科	5年 ふりのきまり 物の溶け方 6年 てこのはたらき	大妻女子大学 石井雅幸	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階 182教室	
8	10月6日(土) 17:00~18:30	12月までの3,4年理科	3年 明かりをつけよう 4年 物の体積と温度 水のすがたとゆくえ	大妻女子大学 石井雅幸		
9	10月28日(日) 10:00~15:00	野外実習	5年 流水の働き 6年 土地のつくり	川崎職員 増潤 和夫 大妻女子大学 石井雅幸	多摩川と生田緑地	
10	12月22日(土) 15:00~16:30	1,2月3,4年理科	3年 じしゃくにつけよう 物の重さを比べよう	大妻女子大学 石井雅幸	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階 171教室	
11	12月22日(土) 17:00~18:30	1,2月5,6年理科	4年 物のあたたまり方 5年 電流がうみ出す力 6年 電気がわたしたちのくらし	国立第三小学校主幹 高木正之 大妻女子大学 石井雅幸		
12	1月26日(土) 15:00~17:30	6年の理科	6年 電気がわたしたちのくらし	大妻女子大学 石井雅幸 JEMA(日本電機工業界)のみなさん	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎B棟8階 830教室	電機の発電充電に関するちしきを広げます。
13	2月16日(土) 15:00~17:00	1学期の理科 5,6年理科	6年 物の燃え方と空気 5年 植物の発芽と成長	大妻女子大学 石井雅幸	大妻女子大学千代田キャンパス 大学校舎C棟1階 171教室	1学期の理科の準備を含めて実習を行います。
14	2月16日(土) 17:00~19:00	1学期の理科 3,4年理科	4年 電気の働き 3,4年 生き物	大妻女子大学 石井雅幸		1学期の理科の準備を含めて実習を行います。
特別	2月25日(月) 18:00~20:30	月や星の観察方法について	4年 月と星 6年 太陽と月	科学技術館 木村かおる 大妻女子大学 石井雅幸	科学技術館6階実験室と屋上	月や星の観察を科学技術館の屋上で行います(東京都の教員研修と共催予定)

表 6. 野外活動支援員育成プログラム

No	日時	テーマ	講師	場所
1	6月23日(土)13:00 ~24日(日)15:00	自然体験活動の基礎知識学習と体験活動 *自然の中で五感を生かせる遊びや生活の仕方などを学習し、子ども達に自然の楽しさを指導できるようにする。	柴崎正行先生、石井雅幸先生 加藤悦雄先生、川之上豊先生	川井キャンプ場 最寄り駅 JR青梅線川井駅徒歩8分 住所 東京都西多摩郡奥多摩町梅沢 187
2	6月24日(日) 9:00~12:10	自然の中での遊び支援実習	北澤伸之先生 (ELFIN体験共育くらぶ)	
3	6月29日(金) 16:20~17:50	野外での危険な植物や虫等の対応について	須田真一先生 (東京大学大学院、特任研究員)	大妻女子大学千代田キャンパス C棟1階 182教室
4	6月29日(金) 18:00~19:30	小学校での野外キャンプ意義と実際	林四郎先生 (北区滝野川小学校校長)	
5	6月30日(土) 14:40~17:50	幼児等の野外引率に関わる安全管理とリスクマネジメントについて	峯岩男先生 (ひさみ幼稚園園長)	大妻女子大学千代田キャンパス C棟1階 171教室、北の丸公園
6	7月6日(金) 16:20~17:50	野外での救急法① けが等の対応と処置方法について	田中喜久美先生 (元甲府看護学校専任教員、看護師)	大妻女子大学千代田キャンパス C棟1階 182教室
7	7月6日(金) 18:00~19:30	野外での救急法② 腹痛等の対応と処置方法について	吉澤謙治先生 (慈恵医科大学病院、小児科医師)	
8	7月21日(土) 15:00~16:30	子どもにとっての野外活動の必要性和 特別支援の子ども達への支援方法について	柴崎正行先生 (大妻女子大学教授)	大妻女子大学千代田キャンパス C棟1階 171教室

なお、野外活動支援員育成プログラムの講義終了後から受講生は、主に千代田区内の幼稚園・保育園・小学校に野外活動支援員として活動を行った。今年度は、4施設に計15回31人が支援員として現場に入った。

5 応募者・受講者

(1) 応募方法

参加者の募集は、大妻女子大学関係者、近隣大学学生、千代田区関係者を中心に募集をした。

大妻女子大学関係者への募集方法としては、本学ホームページ、本センターホームページ、ポスター掲示でプログラムを紹介し、各プログラム担当が関係者への紹介を行った。近隣大学には、ポスターと募集要項及び申込書を大学事務局宛に送付し、学生向けに掲示をしていただけるようお願いをした。また、千代田区関係者への募集方法としては、千代田区立の幼稚園・保育園・小学校に募集要項と申込書を学校（園）長宛に送付し、周知をしていただくことが主な募集方法であった。

（２）応募者・受講者数

応募者数と受講者数は、以下の通りであった（表 7）。

表 7. 応募者数と受講者数

	応募者数	受講者数
特別支援教育育成プログラム	20 名	59 名（うち、途中辞退 2 名）
理科支援員育成プログラム 小学校教員対象理科研修	20 名	支援員 20 名 現職教員 13 名
野外活動支援員育成プログラム	20 名	18 名
合計	60 名	110 名

6 受講者の評価

受講が決定した者に、プログラム開始前とプログラム終了後の 2 回、アンケートを実施した。以下に、その結果を示す。

（１）特別支援教育支援員育成プログラム

①受講前アンケート

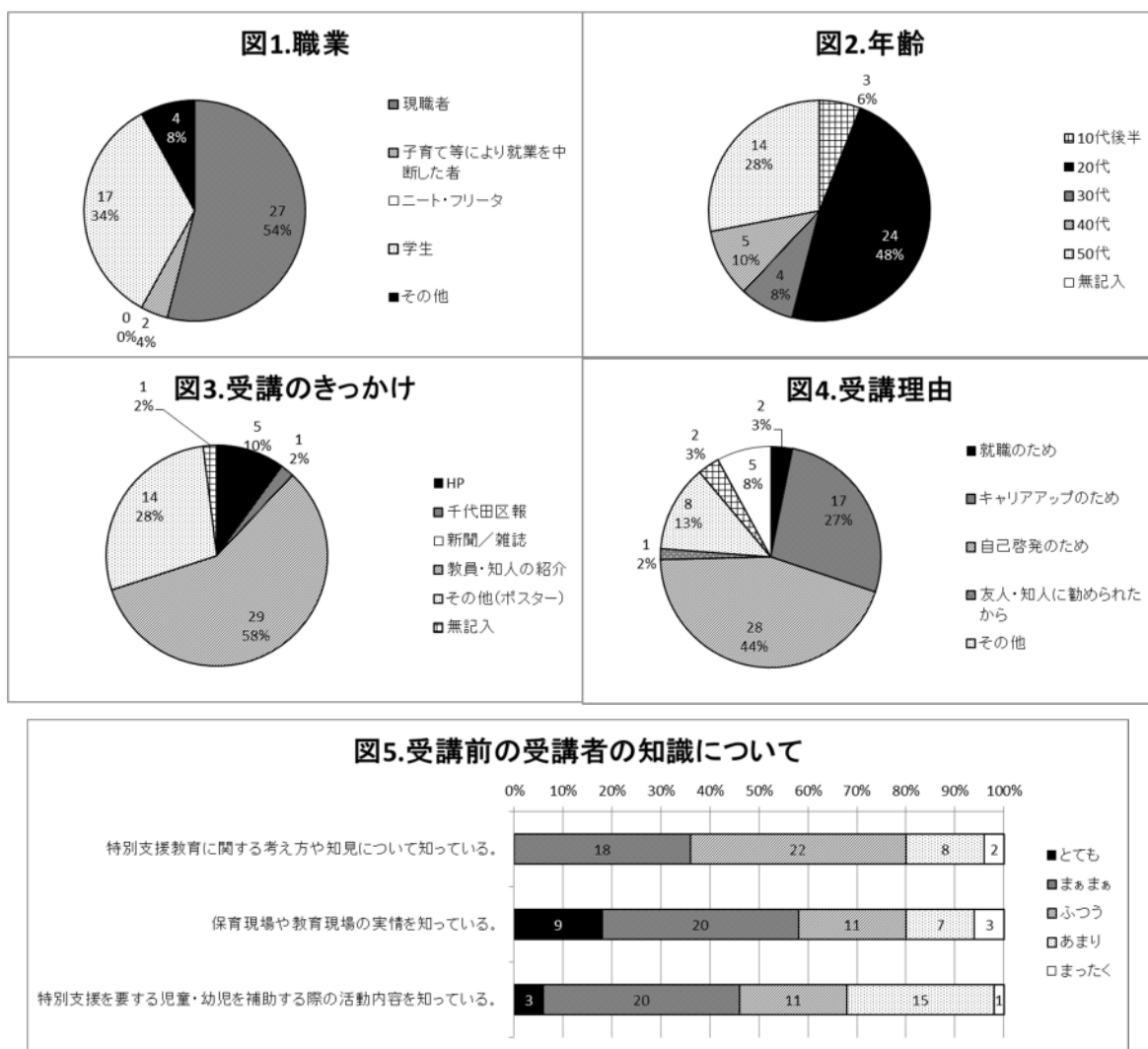
受講者 59 名のうち、受講前アンケートに回答したのは 50 名であった（回収率 84%）。

回答者の半数以上が現職者、1/3 以上が学生であり（図 1）、20 代が半数を占める中、50 代の受講生も多く見られた（図 2）。

受講のきっかけは、「教員や知人からの紹介」が 6 割近くと、学校（園）長宛の案内やホームページなどでプログラムの広報活動を行った結果、人を介して情報が広く伝わっていったようであった。

受講理由としては、「自己啓発のため」や「キャリアアップのため」が合わせて 70%以上であり、自己研鑽の一助になることを期待して本講座に参加していることがわかった。

また、約 7～8 割の人は、特別支援教育の活動内容や現場の実情、特別支援教育に関する考えや知見を「ふつう」以上に知っている、と回答した（図 5）。



さらに、「今回講座を受けようと思った動機をお聞かせください」「今、特別支援教育支援員としての活動で、課題となっている点をおきかせください」「今回の講座について希望することなどを自由にお書きください」という3つの質問をし、自由記述で回答を求めたところ、それぞれ下記のような回答が得られた。

<今回、講座を受けようと思った動機をお聞かせください。>

- ・中高で本年度より特別支援教育委員会を設置し、4月より様々な視点からのお話を伺っている。HPにて知り参加させていただいた。
- ・保育所での勤務を希望しているので、保育士となった時に少しでも役立つと思い、参加をしました。
- ・特別支援を必要とする幼児を現場を見て、興味を持ったため
- ・実際現場を経験された先生のお話から、具体的な対応ケースをうかがい、自分の活動のヒントにしたいと思ったからです。
- ・現在、文京区の小学校で特別支援教育支援員として働いており、具体的な支援の考え方、方法を知りたいと思ったから。
- ・保育士としてこのごろ支援を必要とするお子さんが多いので、具体的な手立てを学びたいため講座を希望させていただきました。

- ・ 支援を必要としている児童に適切な支援、援助、関わりができるように知識を増やしたいと思い参加しました。
- ・ 現在担任をしている学級に特別な支援を要する幼児が在籍しており、介助員がついている。介助員としての援助方法や担任との連携方法等を改めて学びたかった。
- ・ 区の研究会で特別支援の部会に参加しています。自身の学級においても介助員と担任との連携や支援について迷いや悩みもあるので勉強したいと思いました。
- ・ 実際に特別支援教育支援員として現場に入ったため
- ・ 支援するとは、と原点に戻り学びたいと思った。
- ・ 初めて特別支援教育補佐員になったから（幼稚園）。
- ・ 実際、現場に出ているが、今まできちんとした勉強等をしていなかったもので、“支援員”としての考えや活動方法を学びたい。
- ・ 学級担任として、特別支援を要するお子さんにどうか関わっていったらいいか学びたいと思ったため。
- ・ 特別支援員として園で働いていますが、知識の向上を願って参加したいと思いました。
- ・ 他区での取り組みを知り、今後の支援に生かしていきたいと思ったから。
- ・ 障害者（児）のヘルパーを行なっており、学童期の通学における移動支援に関わった際、特別支援学級に関わる機会があり、年々児童の減少が課題となっていたため。
- ・ 特別支援教育についてだいたい知っているつもりだが、詳しく講義を受けてはいないので。
- ・ 支援員さんと一緒に仕事をする立場で、勤務市町村には、このような講座がないため参加して支援員さんに伝えたり自分の仕事に役立てたいと思い受講した。
- ・ 学校の授業で、特別支援を要する子どもについて学び、興味があったため。将来小学校教員を目指す上で、特別支援員について学びたかった。
- ・ 将来特別支援学校で働きたいため。
- ・ 配属されているクラスに自閉症の子供がいる。まちがった対応をしたくなく、少しでも良き援助をしたく学びたかった。
- ・ 現在、支援員を近隣に区でしているため、なにか活かせる情報があればと思い、受講しようと考えた。
- ・ 現在幼稚園で特支補佐員として働いているが、毎日こなすのが手一杯で自分は役に立っているかわからないから。
- ・ 長期休暇中に学童保育の指導員をしていて、その中にいる特別支援を必要としている子どもたちとの関わりをより深めたいと思い、講座の受講を決意しました（学生です）。
- ・ 将来、支援員等、特別な配慮を必要とする子たちの教育へ関わりたいと思っており、その前に、様々な知識を付けたいと思ったからです。
- ・ 特別支援教育について、純粋に興味を持っているからです。
- ・ もう少し、深く、基本から学びたいと思ったので、また学校、現場にいてもっと必要ではないかと考えたから。
- ・ 保育現場で、子どもの支援、教員の動きや考え方について知りたいと思ったから。
- ・ 昨年大変支援活動に役立ったので、自己啓発、意識向上のため、今年も参加したいと思いました。
- ・ 教員志望だから。特別支援学校の教員も併願しているから。

- ・特別支援を要する子どもと関わる機会が何度かあり、どのように接するのかを考えるきっかけとなり、より深く学んでみたいと思ったからです。
- ・特別支援教育についての知識を身につけたいと思ったから。
- ・現在働いている幼稚園に6人の障害を持った園児がおり、支援員の勉強をすることで少しでもその子達に合った対応が出来ればと考えました。支援を必要とする子のためになる事は、他の子のためにもなると現場では実感しているので、“支援”をより理解できたらと思っています。
- ・現在障害を持ったお子さんの保育補助をしているため。
- ・支援員としての知識を少しでも増やしたいと思ったこと。もう一度学び直したいと考えたから。
- ・障害について興味があり、将来特別支援学校の教諭になることも視野に入れている為、参考になると思った。
- ・もともと特別支援教育に興味があったため。
- ・発達支援コーディネーターの講座を今年度受けることになっている。職場での（保育園）支援を必要と思われる子がいる。
- ・娘がもうすぐ3才になるので、自分自身の人生で、もう一度学びたい、そしてその後の仕事につなげてけること、等を考えて母校でもある大妻のホームページを拝見し、ちょうど締め切り前日でした。ご縁があるのかと嬉しく参加。
- ・保育現場で支援員とともに支援を必要とする子と毎日生活しているが、日々起こる困難にどう対処していったら良いのか考えるきっかけをつかみたいと思った。
- ・千代田区でお世話になった3年間参加させていただき勉強になったので、また受けたいと思った。
- ・現在、指導員として働いている上でさらに知識をつけたいと思い希望いたしました。また様々な方との情報、意見交換ができるといいです。
- ・こども園に勤務しているため、クラスに支援が必要な子もいる。支援員の立場を知ること、教師（担任）としての役割を学びたい。

<今、特別支援教育支援員としての活動で、課題となっている点をお聞かせ下さい。>

- ・他生徒との関わり方
- ・「自立」を促していくには、ある程度期間が必要であることは頭でわかっているけれど、つい「手をかけすぎ」てしまうこと。
- ・担任の教師との連携、集団の中での支援方法
- ・様々なタイプのお子さんがあるので個に応じた支援の仕方。
- ・担任と介助員との連携方法。支援を要する幼児以外の幼児との関わり方。
- ・支援の内容や連携の仕方、家庭との連携（担任の立場として）
- ・対象児が自立するために自分で自分の環境に適応する方法を見つける支援の方法について
- ・子ども一人ひとりの課題が多様化している。
- ・子どもに対してどこまで許しどこまで制御するか。担任とも毎日話しているが、日々子どもは行動が変わるので難しい。
- ・担任の先生の思いにどれだけ沿えているか。支援をしている子どもをどこまで助けていけば良いか。他の子どもたちとの接し方。
- ・先生方の特別支援教育に関する意識に個人差があること（情報交換がうまくいかない、支援員

に対しての見方が低い、等)。

- ・特別支援教育支援員個人の自由裁量の部分の画一化ではないでしょうか。
- ・支援の必要と思われるタイプの違う児童が何人かいるので、個々にあった支援の仕方。
- ・支援の仕方がわからない、また教員も支援員さんにどう活動してもらったらよいか具体的な指示が出せない。
- ・どう対応するのか、どんな支援の仕方があるのか。
- ・スクールライフサポーターとして活動させていただいています。自らの活動内容でいいのか、日々自問自答しております。
- ・教員側との連携、対象児となっている児童以外で対象児となりうる児童への対応。
- ・言葉の理解ができない、オウム返しの子にどのように接していったら良いか。
- ・目的に沿うような関わり方が私には確立していません。そこが課題です。
- ・ちょっと違うのですが、幼稚園での介助員の支援内容と、担任、園側との連携の仕方、就学の際の小学校との連携の在り方。
- ・接し方、支援の仕方。
- ・子どもとの適切な距離。
- ・学級内に支援をした方がよいと思われる児童があまりにたくさんいる。でも担当する児童から目を話すことができない。学級経営は成り立っているの？と思うことがしばしばある。
- ・現在、官舎に住んでおりますが同じ建物に2名すでに特別支援を必要とされておられるお子様がいらっしゃいます。恵まれた事に我が娘は今のところハンディキャップはないですが、自分出来る事をして、その保護者の方の子供の気持ちを少しでもやわらげる支援が必要。かつグレーゾーンも増加かと。子を持つ親サイドの理解、周知も進めていかなければと思う。
- ・支援を必要とする子とともに生活している周りのこととの間のトラブル、まわりの子からの差別的発言、行動、保護者の理解のなさへの対応。
- ・子ども園にて、短時間、長時間で担任が変わる中での支援の仕方についての共通理解について。
- ・一人一人のニーズにあった指導や支援内容を園全体での認知していくことの難しさを感じています(共通の認識が、とても大切だと感じます)。
(担任としての立場で)どこまで支援員に頼ってよいか。また支援の手立てを共通にしていくことの難しさ。

<今回の講座について希望することなど、ご自由にお書きください。>

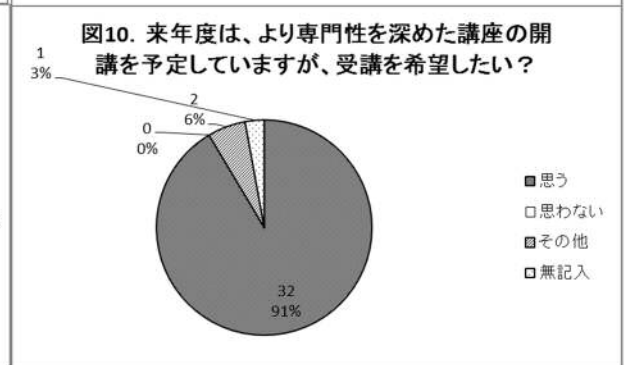
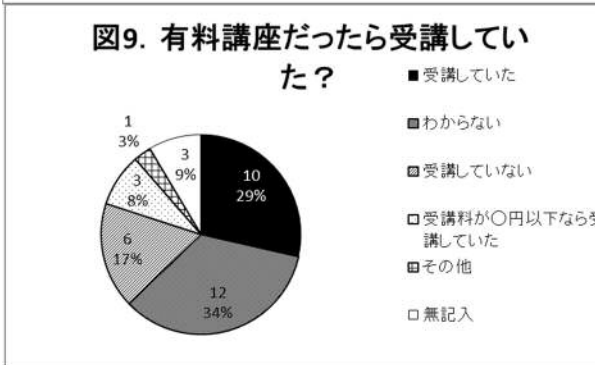
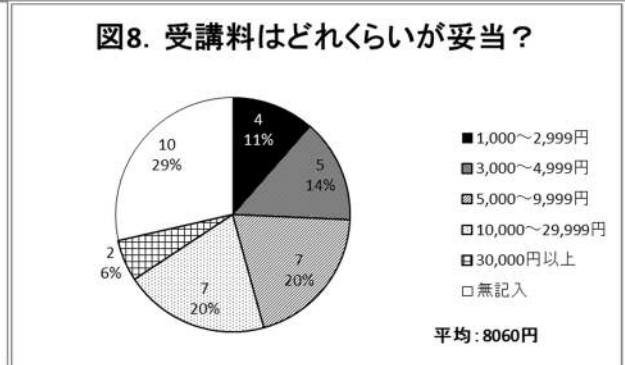
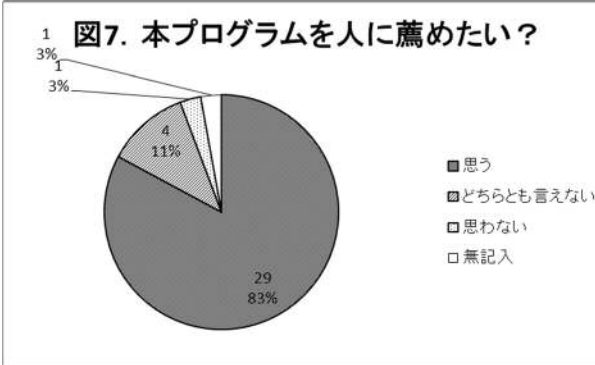
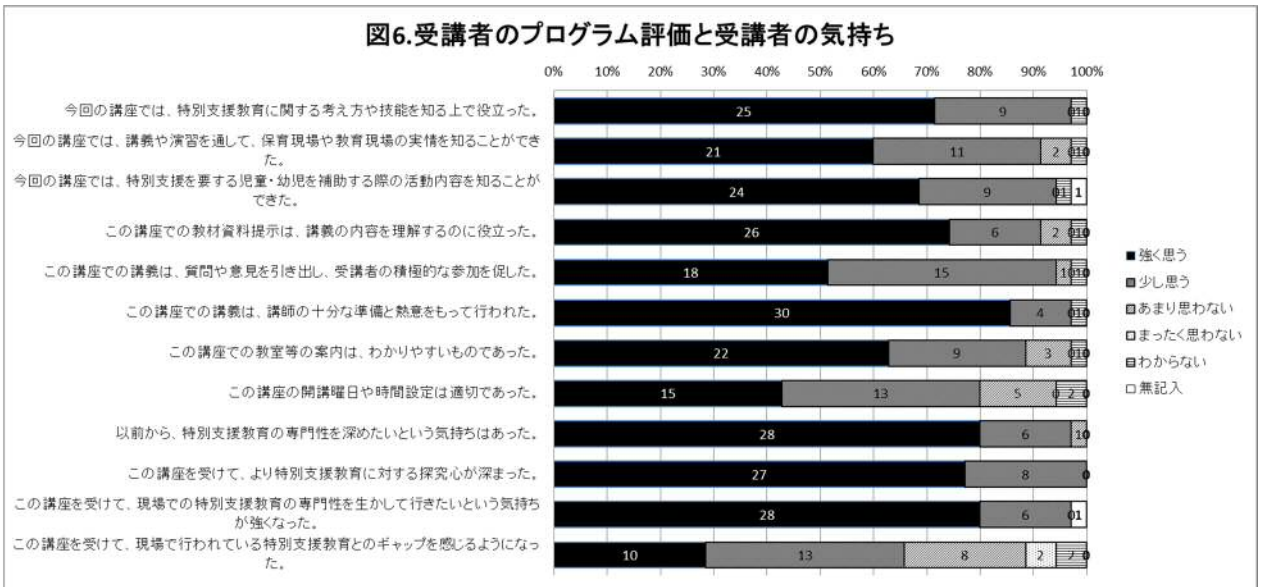
- ・多くの知識と経験からの問題点、解決策等伺いたい。
- ・働き始めてから役に立つ知識を得たいと思っています。
- ・自分の理想とする支援員に近づくことができるようにするために、今自分がすることは何か、今日することとは何かを考える時のアイデアをたくさん持ってほしいからです。既に持っている人、経験している方のお話をたくさん伺いたい。
- ・なるべく具体的な方法を考えていきたいです。
- ・色々な事例を元に、支援、援助、関わりのアドバイスを受けたい。
- ・いつもは担任として子どもたちに関わっていますが、支援員の立場から学ぶ貴重な機会だと思っています。
- ・実践例や具体的な支援の方法も知りたいです。

- ・学級内での自分の役割やクラス全体と対象児との関わり合いを今年度に限らずこれからどう自分なりに理解を固めていくのかの指標が持てたら。
- ・具体的な実践事例を通して何を大切に大事にしていくか学びとりたい。
- ・幼保から小に上がる時の、小が幼保に求めることと、幼保が小に求めることを知りたい。それぞれの学校現場での実態を知りたい。
- ・具体的な支援方法があれば知りたい。
- ・現在、特別支援教育の現場の実情や支援員としての子どもが地域で健常児とともに差別化を問わずとも共生していけるようにするための支援方法や課題解決のための施策について。
- ・現在実際に入っている学級で児童のために少しでも役立てたい。
- ・教員と支援員の力で子どもを成長させる方法を学びたい。
- ・具体的な事例にて対処方法を教えていただきたい。
- ・実際現場にいる児童の様子から周囲がどのような対応をしどのような変化があったのか等のお話を聞きたい。
- ・特支についてわかりやすく教えて頂きたい。小学校、中学校に主に配属かと思うが、幼保についてももっと知りたい。東京都の特別支援教育と他府道県と違う点はあるか。
- ・まだ勉強中の身なので、実際の現場の現状や問題点など。そして必要とすることなどを知れたらと思います。
- ・日々変化し続けている特別支援教育の現状を知れたらと思います。
- ・自分にはまだあまりこの手の知識がないので、どんどん色々な知識を吸収していきたいです。
- ・マニュアルはないと思いますが、その子その子にふさわしい支援に少しでも近づけるように、私自身が成長できればよいと考えます。
- ・事例研究を通し、様々な現場の様子を知りたい。ともに考えていくことで、悩みの切り口を見つけたい。
- ・特別支援教育に関する知識や対応の仕方などを多く教えていただきたいです。
- ・小学校教員を目指しているので、これからもっと必要になってくるであろう特別支援児への対応や支援を学びたいと思います。
- ・“支援”に関すること、保育の現場でのみしか知らないなので、広く知識を得たいと思っています。
- ・就学に向けて必要なこと、またどのように対応をしてあげるべきかなど教えてもらえると嬉しいです。
- ・その児童にとってより良い支援の方法を考える手がかりとしたい。
- ・まだ学生で、現場の実態が分からない為、現場の実態について知りたい。
- ・特別支援教育の実態や課題など。
- ・詳しく知りたいと思う。
- ・現場の声を聞けることは大変貴重なことだと思います。
- ・支援員がどのような困難にぶつかりどう向き合いどう対応したのか、生の声を聞いてみたい。
- ・この講座を受ける中で、自分の支援について、指導員としての役割について考えていきたい。
- ・基礎的なことから、専門的なこと、実際働いている人たちとの話し合いや、特・教をうけている子の保ゴ者の意見や体験など、聞いてみたい。臨床センターの見学もしてみたい。
- ・すぐに現場で活かせるような、具体的なお話がきけること。就学前の支援について学びたい。

②受講後アンケート

特別支援教育支援員育成プログラムでは、講座の途中に2名の受講者（いずれも学生）から「内容が思った以上に難しい」「自分がそのレベルにいない」ということを理由に辞退があった。最終的な受講者57名のうち、受講後アンケートに回答したのは35名であった（回収率61%）。

図6に示すとおり、本プログラムへの評価に関するいずれの質問項目においても「強く思う」「少し思う」を合わせると8割以上となっており、受講者にとって満足いくプログラム内容や運営であったことがわかる。しかし、「この講座を受けて、現場で行われている特別支援教育とのギャップを感じるようになった」という項目に関しては、「強く思う」「少し思う」を合わせて約66%であり「ギャップ」の詳細について確認する必要があると思われた。



受講者の多くは本プログラムを人へ薦めたいと思っており（図7）、妥当だと思われる受講料（図8）の平均は8,060円であった。しかし、有料講座だった場合に受講したいと思う人の割合は約

30%（図 9）と少なく、多くの方にとって、無料で質の高い講座を受講できたところも本プログラムの魅力の一つとなっていた様子がうかがえた。しかし、来年度、より専門性を深めた講座を開講した場合に受講したいと思う人は9割以上（図 10）と、来年度へ期待する声が多く寄せられた。

「今回、講座を受けてよかった点はどのようなところですか？」「今回、講座を受けてみて、あなたにとって課題となった点はどのようなところですか？」「今回の講座について感想、ご意見、今後に向けてなど、ご自由にご記入下さい」という質問項目に対し、自由記述で回答を求めたところ、それぞれ以下の様な回答が得られた。

<今回、講座を受けて良かった点はどのようなところですか？>

- ・先生の立場、支援員の立場、両視点から理解できた。
- ・支援員とともに働く側の話、支援員として働く側の話が強いインパクトがあった。
- ・最後の事例とグループディスカッション、それに対する講師の話。
- ・具体的な事例や現場での体験が伺えたこと。
- ・小学校に関わっていらっしゃる方の話はとても参考になりました。松浦先生には是非来年もお願いしたいです。
- ・初回、今入っている学級の担任と一緒に受けたので、講座を受ける度に担任と具体的に話をすることができた。「支援員育成講座」ではあるが、支援員にとっても担任にとっても支援員の役割や担任はどうあるべきかを考えることができた。
- ・具体的な支援の方法等を聞くことができて良かったです。
- ・もともと、特別な支援が必要な子どもに興味があったので、それぞれの講座で、実情や支援方法が知れて良かったです。
- ・様々な先生方のお話が聞けたことや、気を重ねて他の支援員さんともお話が聞けました。
- ・特別支援学校での実習ではわからなかった実際の支援の仕方を深く知ることが出来た。
- ・講師の方の体験を通じて、色々な事例のお子さんの様子を知ることができましたし、具体的な指示の出し方も教えていただけて大変良かったです。
- ・現場の先生の話や事例を聞いた点。働いている方と話し合う時間がなかったので、とても参考になりました。
- ・9 回目の所沢の幼稚園の先生と、小学校の現場の松浦先生の講義はわかりやすく、実践に役立ちます。
- ・現場で支援員として働いている方のお話を聞くことができたこと。
- ・私は小学校の先生を目指しているので、実際に現場の先生の話も聞いて良かった。
- ・初めて得た知識や具体的な援助方法を知ることが出来た。情報交換をすることで、たくさんの意見を聞くことができた。
- ・講師の先生からのお話に加え、受講者の他園、他校種の方のお話や実践例、学生の皆さんの気付き等をうかがうことができ、現場の様子や対応例なども知ることが出来た。
- ・実践に基づいた話が多く、同じ悩みを共有していく形がより考えを深めることが出来たと思う。
- ・事例が豊富であったこと。
- ・小学校で支援員をしているので、小学校での実践や大事にしていきたいことを聞くことができて良かったです。

- ・具体的な支援の方法を何例も聞いたことがとても良かったです。
- ・色々な専門的な話がうかがえ、同じテーブルの方と話し合えたこと。
- ・事例をもとに支援の方法など具体的に話して頂くと保育に活かしていけると思った。職員にも話していくことができた。
- ・区ごとに違いがあることを知ったが、基本的にどのような体制で行うか、ひとりひとりがどのような考えで臨むべきか改めて認識できた。
- ・現場の話、臨床での話が聞けてとてもためになった。
- ・他の園、学校での実際の支援を知ることが出来た。
- ・実際に特別支援を要する子どもたちとかかわりのある先生方の話を聞くことが出来たのは本当に良かったです。
- ・私はまだ指導未経験であり、想像がつかないところがあったが、実際の体験談から考えていく時間があり、とてもためになった。指導経験者の方とも話す機会があり良かった。
- ・グループワークの課題をすることで、他の参加者の方との意見交換が行うことが出来た点。
- ・経験に基づいたお話を聞けました。接し方について参考になりました。
- ・講師の話を受けて思ったことや感じたことを、他の受講者と話し合うことで、自分の気持ちや相手の話を聞いて、深めていくことが出来た。
- ・改めて特別支援教育とはひとりひとりの子どもたちと真摯に向き合い学び合う事（支えあうこと）、とコミュニケーションの大切さを痛感しました。
- ・講師の先生が毎回違う点では、色々な話が聞けました。

<今回、講座を受けてみて、あなたにとって課題となった点はどのようなところですか？>

- ・担任が変わった場合の順応性。
- ・この講座の受講者は、目的意識も意欲もあつてこの前向きの姿勢が現場を活性化しているのがよくわかった。私の職場で働いている下流意識の若者（三浦展や内田樹の言うところの意欲の低い若者）に対して、どのようにこの講座で学んだことを伝達できるか、学びの低い職員の意欲を高めるという課題に、ここで得た知識をどう生かすか、今の私にとってこれが一番の課題です。
- ・さらに知識を深めていかななくてはいけないと改めて感じた点。
- ・困り感に対応する手立てスキルの数。
- ・自分の未熟さ。
- ・子どもの好きなものを使っての声掛け、という話が出ていて、そういったことへの知識もいざれ必要になるので、知っておいたほうが良いと感じた。
- ・支援が必要な子への更なる理解、他の子との関わり方の引き出しを考えること。
- ・様々な視点から考えることや園の職員などしっかり話し合っていく事。
- ・支援を必要としているこどもだけでなく周りのこどもにも配慮はもちろん必要であるということ。
- ・本人と良い関係を作るのが難しいと感じたことがあります。講師の方々のような“うまい言葉”が見つからない、ついイラッとしてしまうことが私の課題です。
- ・自分が思っていた以上に色々な子どもたちがいることがわかり、その一人ひとりに対応していく力をつけていかなければいけないと思いました。

- ・まだ勉強が足りない、知らないことがとても多いと感じた。
- ・現場を知ること。
- ・自分の視野が狭く、子どもに合った対応を日々試行錯誤すること。
- ・身につけたことを実際に現場に反映させること、様々な事例を知ること。
- ・より専門性を身に付けたいと思った。
- ・担任の先生と終わった後には話ができるけれど、始まる前の打ち合わせをする時は少ないので、課題にしていきたいと思いました。
- ・現在関わっている発達障害も含めた障害児の子たちを小学校へ送るまでに何ができるかをより深く考えるようになった。
- ・まだまだ勉強不足を痛感させられました。ありがとうございました。
- ・特別支援教育についての知識はあるが、経験がまだ不十分であり“このような子どもがいたら？”という投げかけにあまり案が出てこなかった点。
- ・学校の要望と児童との接し方、担任とのかかわり。
- ・待つ、見守る支援が足りないこと。
- ・なかなか難しいですが、実際に特別支援を要する子どもたちと関わるのが大切だと思いました。
- ・今回講座で学んだことを基盤として、支援する子ども一人ひとりに合わせて行動できるのが課題となっている。
- ・知識がないと児童にとってもかわいそうだと思います。もっと勉強してわかってあげられるようになりたいです。
- ・未経験者であるからして、支援員の活動を実際に行ってみないと、と感じました。
- ・まずはこれから支援をする場を見つけること。そして、そこで、対子ども対保育者の人間関係をどのように構築していくか。
- ・物事を画一的にとらえない。一人ひとり個性を大切にしながら、どう支援していくことが良いかと常に問い続けていくことを忘れないこと。
- ・教育支援員ということをよく知らなかったので良かったです。

<今回の講座について感想、ご意見、今後に向けてなど、ご自由にご記入下さい。>

- ・昨年度の講座よりも講義形式が多くなったので、いいお話だったと思う反面、なんとなく全体的に薄まってしまった気がする。講座を受けるだけで認定証を出してしまうというのは厳しい現場での仕事との間に解離が生じてしまうのではないか。あるいはもっとレベルの上の段階の認定証を出すとかして、初級・中級・上級とか何か違ってもいいかなとも思う。分野別にするとか。
- ・来年もお願いします。
- ・幼小両方の話を聞けたことも良かった。今回参加した担任は今年入った新採の先生だが、今の学級にも支援員が入ることは多いので、担任の先生方にもこの講座を積極的に知らせると良いと感じた。また来年も行なって欲しい。
- ・現場での実際の関わり方を知ることができ勉強になりました。多くの様々な子ども達と関わられるように、対応をいくつも考えられるような想像力なども養っていこうと思いました。
- ・どの講座もとても参考になりました。時間が2時から4時で個人的に微妙な時間帯でしたが、

全部受けることができて良かったです。

- ・ 171 教室はスクリーンが見つらなかったのも 242 のほうが良かったです。
- ・ 特別支援を必要としているお子さんに十分に支援員が関わりあえる状況が必要なのだな、と感じました。
- ・ とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ・ 今後自分が保育者として就職した際、講座で得た知識を生かしていきたいです。
- ・ とてもわかりやすく勉強になりました。園行事等で出席できない回があったのがとても残念でした。ありがとうございました。
- ・ 支援教育だけでなくどのような場でも人（対児、対保護者、支援員同士、支対担任など）との人間関係、コミュニケーションがいかに大事かがわかった。
- ・ 支援員を対象としているのか、学生を対象としているのかわかりづらいところがあり、どちらかという学生対象という印象を受けました。
- ・ またこの時間に（土の午後）講座を行なってほしい。
- ・ ありがとうございました。
- ・ ビデオを見て考えたりたくさん話し合うことをしたいと思いました。
- ・ 休憩をはさみながら、お話をしたり気持ちを楽に講義を受けることが出来た。
- ・ 特別支援教育支援員は、福祉でいうところの障害分野に当たります。児童学科の学生にも大切ですが、多摩キャンパスの社会福祉を学ぶ学生たちにも積極的に受講案内の PR をしていただきたいと思いました。福祉学科では、実際に支援員として働く方や、実習等で障害を持つ児童とのかかわりも深いため、双方にとって良い学びになると思います。
- ・ 本当に子どもが大好きな先生方に囲まれ、楽しく受講できました。
- ・ 事例をお聞きすることができ、より身近な講義内容となりました。ワークショップも良かったと思います。

（2）教員対象理科研修及び理科支援員育成プログラム

受講者 33 名中、受講前アンケートに回答した者は 26 名（回収率約 79%）、受講後アンケートに回答した者は支援員 12 名（回収率 60%）、現職者 5 名（回収率 38%）であった。

受講前アンケートでは、受講者の 6 割以上が学生であり、約 3 割が現職者であった（図 11）。年齢も、20 代～30 代で 96% を占め（図 12）、若い世代に需要が高いことがうかがわれた。

本プログラムへの応募のきっかけは、「教員・知人の紹介」が 7 割以上と多く、次に「HP（ホームページ）」、「その他（ポスター）」が続いた（図 13）。ここでも特別支援教育支援員育成プログラムと同様、案内の郵送やホームページなどで広く広報活動を行った結果、最終的には口コミで本プログラムの情報が伝わり、応募のきっかけとなっていることが推測された。

受講の理由には、こちらも特別支援教育支援員育成プログラムと同様、「キャリアアップのため」と「自己啓発のため」を合わせて 8 割以上（図 14）と、自己研鑽の一助となることを期待して受講していることがわかった。

受講者の理科に関する知識等をプログラム前後で比較したところ（図 15、図 16）、回答者数が違うものの、「理科は、好きな科目だと思う」以外の項目全てで、「強く思う」「少し思う」と答える受講者の割合が受講前よりも増えていた。

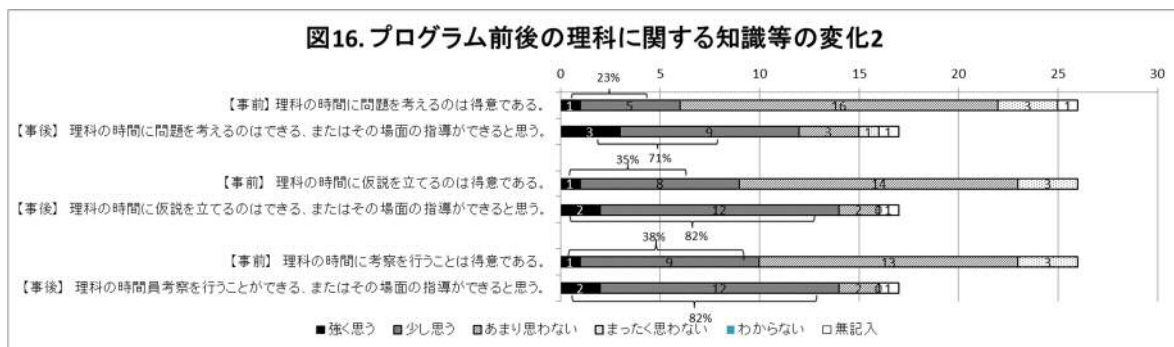
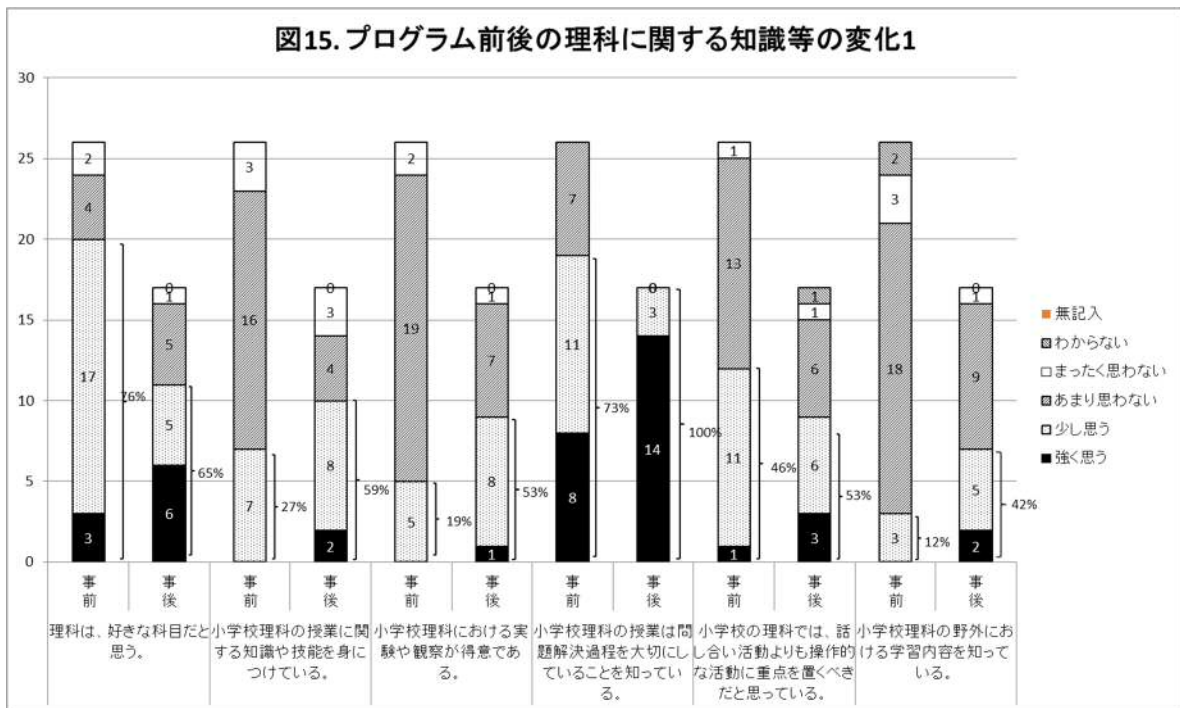
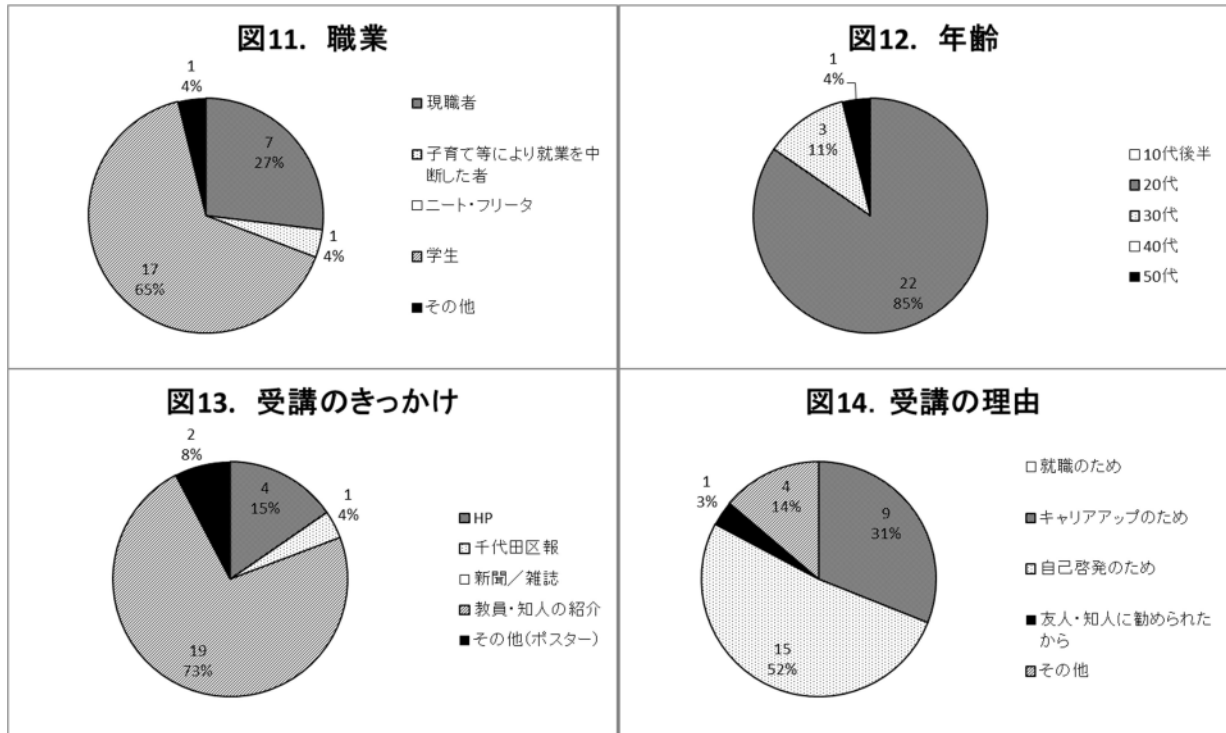


図17. 受講者によるプログラム評価(支援員)

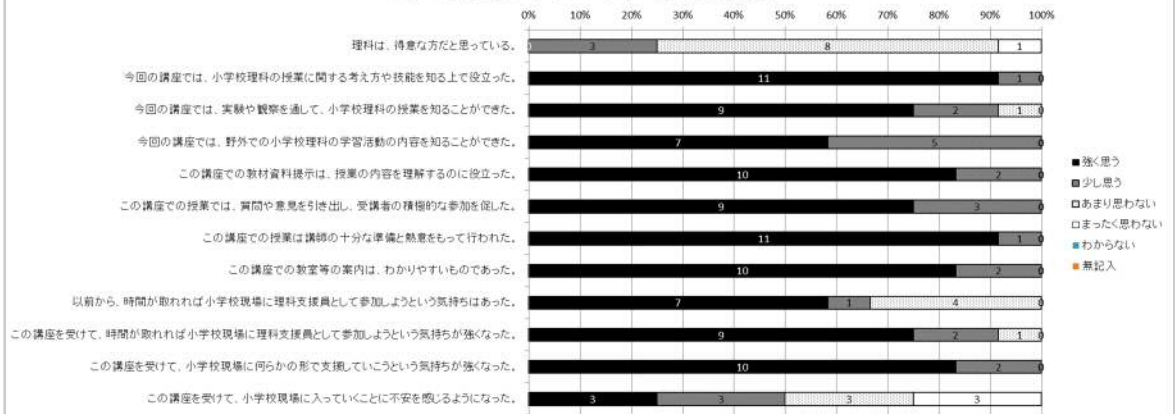


図18. 受講者によるプログラム評価(現職教員)

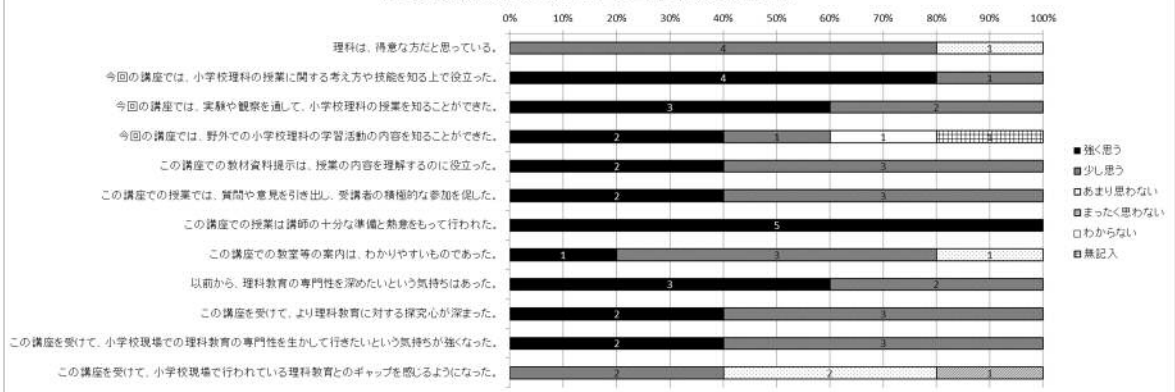


図19. 講座を薦めたいか(支援員)

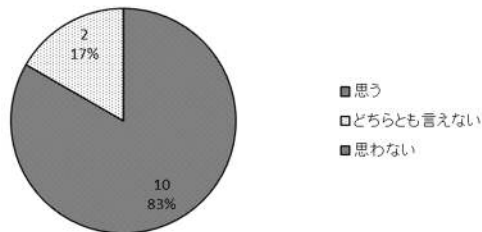


図20. 講座を薦めたいか(現職教員)

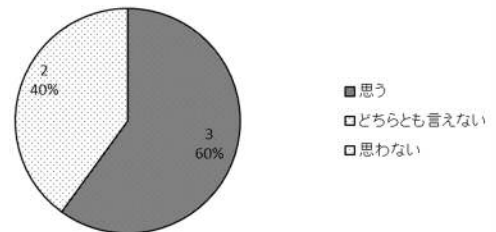


図21. 受講料はどれくらいが妥当? (支援員)

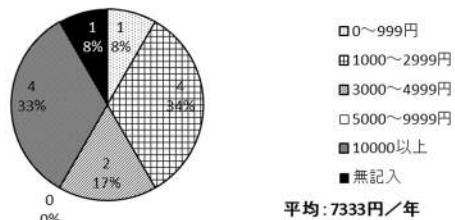


図22. 受講料はどれくらいが妥当? (現職教員)

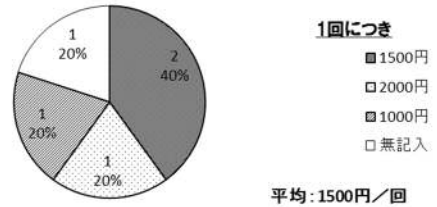


図23. 受講料が有料だったら受講していた? (支援員)

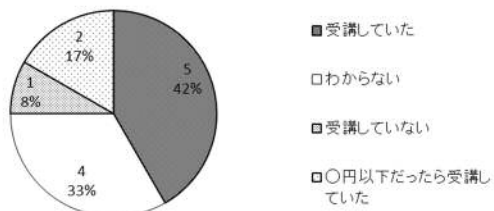
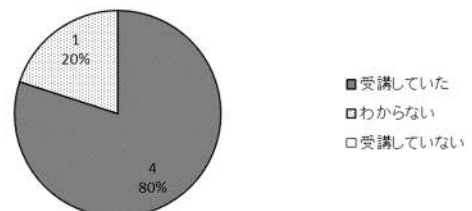


図24. 受講料が有料だったら受講していた? (現職教員)



また、図 17、図 18 より、支援員、現職教員共に本プログラムをとおして、小学校理科の知識や技能、などを知ることができたと感じていることがわかった。

図 19、図 20 から、本プログラムが他者に薦めたいと思うくらい満足の行くものを提供できていたこともわかり、現職教員では有料であっても受講したいくらいの内容であったととらえられる（図 24）。

事前アンケートより、「今回、講座を受けようと思った動機をお聞かせください。」「今回の講座について期待することなど、ご自由にお書きください」の質問を、受講後アンケートより「今回講座を受けて良かった点はどのようなところですか」「今回、講座を受けてみて、あなたにとって課題となった点はどのようなところですか」「今回の講座についての感想、ご意見、今後に向けてなど、ご自由にご記入ください」の質問を、また事前アンケートと受講後アンケート双方に共通する質問として「現在、理科教育に対してご自身の課題となっている点をお聞かせください」「問題解決の過程を行う上で大切にしなければならぬことは何だと考えていますか。大切にすべきことを書きだしてください」「小学校理科では、観察や実験を行うことが大切といわれていますが、あなたはどのような理由で観察・実験を行うと考えていますか。あなたの考えを書いてください」を、自由記述にて回答してもらった。その結果を以下に記す。

◆今回、講座を受けようと思った動機をお聞かせください。（事前）

- ・初任ということもあり、いつ高学年・中学年になって論理的に授業がてんかいできるようにするため。講師が石井先生であるため。
- ・自分自身の理科の知識を深め身につけたいと思ったから。
- ・小学校教諭を目指しているため、少しでも自分の知識や学びにつながればと思ったため。
- ・理科に対して苦手意識を持っているので少しでも克服するために講座を受講しました。またここで得る知識を将来の夢のために使いたいと思ったからです。
- ・小学校教員を目指しているので、理科の知識や技能をもっと身につけ、現場での実践の活かしたいと思ったからです。
- ・将来のため。
- ・将来のため。
- ・興味を持ったから。
- ・小学校教員を目指しているので、理科の知識や技能をもっと身につけ、現場での実践の活かしたいと思ったからです。現場に役立つと思ったから。
- ・理科があまり得意ではないので、知識を身につけるため。
- ・将来、理科の授業で自分の材料になると思ったから。
- ・理科教育に興味があったため。
- ・大学で理科教育を受けていて、興味を持ったから。理科を指導する知識を身につけたいから。
- ・理科は得意か不得意かで言えば不得意な方で、だからこそ自分のために学ばせていただき、理科への関心を深めるため。
- ・小学校での理科授業の進行に役立つと思ったから。
- ・理科が好きで興味を持ったため。

- ・校内研究のテーマが思考力表現力の育成～理科の指導を通して～なので、講座で学んだことをいかしたいため。
- ・理科支援員として働いているが、現職を予期していなかったため、知識不足。
- ・理科は好きな教科ではあるが、教える立場になる前に少しでも知識を得たいと思ったから。
- ・小学校教諭を目指しているが、理科に関する知識がないと思ったため。
- ・校内の先生に勧められたから。
- ・今年高学年の理科を指導することになって苦勞しているため、勉強したいと思ったからです。
- ・理科を教える際に教材研究が不十分で、指導に不安があったため。
- ・指導要領が変わり、活かせることを学びたいと考えたため。
- ・理科は好きな科目であるが、授業の流れがいいのか学びたかったため。

◆今回の講座について期待することなど、ご自由にお書きください。(事前)

- ・具体的な授業の方法が知りたい。○○の単元だったら、この単元の重要ポイント（授業をする上で）と、それを授業にしたらどうなるかを提示してほしい。
- ・どういことを勉強して、どういう結論なのか。
- ・一つの分野を集中的に学んだことがないので、集中的に学ぶことでとてもいい学びになると思っています。
- ・野外実習と、月と星の観察にとっても期待しています。
- ・特になし。
- ・理科の授業をするときに大切なことは何かを知りたい。
- ・理科の面白さ。
- ・幅広い分野において実践的な内容を期待します。
- ・様々な理科教育に関する知識。
- ・自分が授業を考える上で、足りないところを補いたい。
- ・子どもたちが観察、実験を通してどのように問題解決していくか。
- ・理科を指導する知識。
- ・理科への関心を深める、様々な実験を通して自分のものになるような経験をしたい。
- ・授業をする上での心構えを知りたい。
- ・特に星のことについて楽しみです。
- ・理科の授業に対する自信を持ちたい。
- ・専門家からのお話や自分の疑問を聞きたい。
- ・少しでも理科を教えるにあたり、自信がついたらいいなと思っている。
- ・理科の知識向上。
- ・授業に役立つ内容であると思ったので、申し込みました。
- ・実験の知識を獲得すること。
- ・子供が満足する授業の指導方法を教えてほしい。
- ・一単元での授業の流れ、教科書の内容を超えたお話が聞けたら嬉しいです。

◆現在、理科教育に対してご自身の課題となっている点をお聞かせください。(事前・事後)

<事前>

- ・理科の授業を実習の際に一度しか授業をしたことがないため、授業の基本的な展開法が不明確である。具体的な授業を見ることができない。
- ・そもそも知識がないのでそこが課題です。
- ・実験の準備から方法、片付けが身につけていないと思います。実験が一人でもできるような力を身に付けたいと思います。
- ・問題解決能力も含め、実験や観察の知識・技能を身につけなければならないと思います。
- ・理科が苦手なので、理科の内容を理解することが課題。
- ・地下の授業をするときに、大切な事は何か。
- ・教え方、指導の仕方。
- ・知識・技能をもっと深めていきたいです。
- ・そのように問題を提示するか。
- ・知識不足、経験不足。
- ・実験に対する知識。
- ・問題に対して、どういうふうに仮説を立て、考察、結果へ導いていくのか、またその過程について。
- ・器具の使い方。
- ・仮説を立てたり考察したりすること。
- ・身近な自然事象に対して理解が低いこと。
- ・児童の疑問に答えたいが一部は答えられない。
- ・まだ児童に教えたことがないのでわからない。そして、自分自身の課題がまだわからない。
- ・実験に関する知識や技能が身につけていない。
- ・児童の思考の流れを読むこと。
- ・自分の知識が足りないこと、何を指導し、何を考えさせられるのかわからず、手探りであること。
- ・子どもに理科の時間に仮説を立てさせたり、実験の手順を計画させたりすることが苦手。
- ・問題解決の過程を取り入れた学習をどう広げていくか。
- ・教科書の内容のみの知識しかないこと。

<事後>

●支援員

- ・知識や技術がないこと。
- ・興味を持ってくれそうな実験などをさせたいが、時間が余分になさそうな現状。
- ・子どもが仮説を立てて、考察を述べるときの根拠ある意見。
- ・理科が苦手。
- ・実験・観察の技術。
- ・小学校理科で学ぶ程度の知識しかない（中学・高校レベルはわからない）。
- ・問題に対して答えが出てしまうと納得してしまい、他の視点から問題を見出すことが難しいです。
- ・「なぜ？」と思ったことを「まあいいか」で終わらせてしまう点。
- ・理科教育での必要な知識が不足しているところ。
- ・自分自身の知識不足・実験器具の使い方。

●現職教員

- ・野外活動、特に地層、自分に知識がないことと、安全面が心配。
- ・教材に対する知識が足りないこと、教員歴に対して理科を指導する機会が少ないこと（学校事情による）。
- ・授業の作り方、展開。
- ・若手教員の育成。
- ・教材と魅力と学習事項を繋げること。

◆問題解決の過程を行う上で大切にしていかなければならないことは何だと考えていますか。大切にすべきことを書き出してください。（事前・事後）

<事前>

- ・事象提示。
- ・仮説をたてることが大切だと考える。
- ・問題を捉えることから考察（まとめ）までの一連の手順を丁寧に、大切にすること（考えること）
- ・問題とされる部分をしっかりと明確にしなくてはいけないと思っています。
- ・ひとつひとつの事柄（仮設や予想、そして結果など）をきちんと整理して問題と向き合うことだと思います。
- ・自分の考えを持ち、なぜそう思ったのか考え、実際に実験をしてどうなったのかを考えることが大切だと思う。
- ・なぜそのように考えたのかを理解すること。
- ・いろんな実験を試してみる。
- ・結果が仮説と異なった時に、どこに異なる部分があったのかさかのぼって考えること。
- ・仮説が確かめられたかどうか。
- ・実験を重ねていくこと。
- ・1つ1つ子どもが理解しているか確認すること。
- ・実際に触れて体験すること。
- ・自分で仮説を立て、それがどのように結論に結びつくか。
- ・なぜ、どのようにして、どんな条件で、を大切にすること。
- ・“なぜだろう”に対しての解決方法を考えること。それを確かめること。
- ・子どもたちに問題意識をしっかりとらせること。問題意識を持って仮説、実験、結論、考察させること等。
- ・児童への投げる疑問などどうすればよいか。
- ・一人ひとりの意見や少数意見。
- ・問題となることを考え、その問題を解決するためには、どういったことが言え、どういった方法で解決できるかを考えること。
- ・子どもにはっきりと何を考えるか伝えること、体験が不足していたり知識が不足していると考えられないので、考えられる状態に指導すること。
- ・児童が疑問を持つ事象提示（児童の身近なもの、児童全員がさわられるもの）教材が児童の日常によく目にするか。

- ・課題に対する結果と解決方法の見通し。
- ・仮説を立てて検証し、考察すること。
- ・児童が、自分の問題をとらえこだわりを持って追求していくような学習をしていきたい。

<事後>

●支援員

- ・子どもが問題意識を持つ部分。
- ・理科教育での必要な知識が不足しているところ。
- ・「なぜ？」と思ったことを調べたり考えようとする気持ち。
- ・「なんで?」「どうして?」という疑問を持ってその問題に対して考えようとする事が大切だと思います。
- ・実体験、実生活にもとづいて考える。
- ・問題→根拠を元に予想→確かめる実験→結論というプロセス。
- ・予想をたて、結果が予想と違った時にどうしてか考えることが大切。
- ・教師が児童に対しての発問の仕方や提示法。
- ・考えて自分なりの解決策を出すこと。わからないと考えることを放棄させない。

●現職教員

- ・手立て。
- ・問題設定、仮説考察の場面で手立てをもつこと。児童に身につけさせるべき内容を明確にもつこと。
- ・事象との出会い。
- ・一人ひとりのこども、自ら主体的な問題解決を行う。
- ・児童に問題だと思わせること。

◆小学校理科では、観察や実験を行うことが大切といわれていますが、あなたはどのような理由で観察・実験を行うと考えていますか。あなたの考えを書いてください。(事前・事後)

<事前>

- ・子どもが実際に自分の目、耳、手を使って体験したほうが、子どもにとって非常に学習意欲がわく。
- ・わかりやすく、子ども自身で解決してより身近に感じるができるようになるため。
- ・実際に目で見て確認することの大切さ、自分の予想と合っていること、反することがあることを知ることが、生きていく上で(学びの中で)大切になるから。
- ・疑問や不思議だと思う気持ちを抱いてから観察、実験を行うと私は思います。
- ・もっと知りたいと思う気持ちを育て、自分自身が成長するためだと思います。
- ・知識だけではなく、実際に目で見たり触ったりして体験することが必要だから。
- ・自分が考えたことを実際に目で見て理解することができる。
- ・文章を読んだり、人から聞いただけでは、イメージしづらいことを実際に自分の目で見て確かめるために行うもの。
- ・実際に起こる現象を目で見て感じるため。
- ・生活、環境に結びつけているから、生きていく上で必要な情報を得られるため。
- ・最近では学習塾などで学ぶことが理論的な事しか知らない子どもが増えてきているため、実際に

見て、試めることが必要であると思う（原文ママ）。

- ・子どもにとって印象に残るし、机上学習では得られないものが得ることができると思います。
- ・実際に自分で見ることによって、それがきちんと実証されることを確認するため。
- ・生活と結びつけて考えることができるから。
- ・実際に行うほうが身につくから。
- ・自分の目で見て、実際に確かめることが大切だから。
- ・自らが体験することが一番の基礎だと思うから。
- ・実際に体験することにより、なかなか忘れないのではないかと考える。
- ・観察や実験をすることで、教科書だけで学習するよりも理解しやすくなるため。
- ・人は、自分が体験したことしか本当には身につかないと思います。また、興味の幅を広げるにも、観察や実験が必要と考えます。
- ・手を使うこと、活動、体験、実証すること、問題を解決させるため。
- ・観察では小さな変化に気付けるような観察力を養うため。実験では予想したことを証明、検証するため。
- ・自分の目で見て結果を確認したほうが、知識としてより身につくから。
- ・体験の中から学んでほしい。

<事後>

●支援員

- ・子どもたちが抱く疑問を実際に目で見て解決することができるため。
- ・知識よりも何よりも自ら行った体験が一番の学習だから。
- ・より具体的に、そして何かに結びつけて考えるようになるため。
- ・自分の目でみたりさわったり経験をすることは大切だから。
- ・自分の頭で考え、手を動かして実験すること。
- ・自分の目でものを見て自分でなぜか考え、自分の力で確かめること→自己解決できる力を育む。
- ・観察・実験を実際に行うことで印象深く頭に残ると思うからです。
- ・印象に残りやすく納得できるからだと思う。
- ・自分の目で見て考えられるようにするため、体験するため。
- ・目で見て視覚的にとらえ、理解がよりしやすくなるため。

●現職教員

- ・実際に行うことで知識が身につく。
- ・客観性、再現性、実証性のある結論や考察を得るため。
- ・予想をたて、自分の考えが正しいかどうか確か（原文ママ）
- ・実感を伴った理解を図るため。
- ・体験すること。

◆今回、講座を受けて良かった点はどのようなところですか？（事後）

●支援員

- ・一人ひとりで実験できたところ。
- ・多くの実験をみることができたこと。

- ・お話を受けたあとに自分で実際におこなってみることが良かった点です（一人または少人数でできてよかった）
- ・新しい教材が手に入ること。授業方法を知れたこと。意外と知らない注意点を知れたこと。
- ・先生にじっくり教えてもらえたこと（実験の場面で）。
- ・実験器具の点検の仕方や取り扱いについて知ることが出来た。
- ・理科の知識が身についた点。
- ・多くの実験をすることができた。
- ・現場で不明な点が出て自分なりに調べてもよくわからない時、石井先生に質問すれば全て解決し、適切なアドバイスを頂いたこと。
- ・様々な実験をして、子どもたちに教えるなら…と考えることが出来た。
- ・実際の実験器具を用いて行なっていたので、指導するポイントや知識を増やすことが出来た。

●現職教員

- ・実際に実験したり観察できたりしたことで、すぐに授業に活かせた。
- ・改めて予備実験の大切を感じられたところ。
- ・多くの実験、観察ができたところ。そして好きになったところ。
- ・キット活用も含め、様々なニーズに応えようとしていると感じた。

◆今回、講座を受けてみて、あなたにとって課題となった点はどのようなところですか？（事後）

●支援員

- ・子どもが問題意識「なぜ？」と思えるような指導や提示方法。
- ・学んだ知識を先生たちに伝えられる場が少ないところ。
- ・更に細かな知識と授業計画。
- ・もっと理科の内容について学ぶ。
- ・実験の手順。
- ・中学、高校程度の科学に関する知識。
- ・教師となったときにどのように授業をしていくのか。一つの実験にこだわらず、他の実験で同じ応えを出す方法を見つける力をつけていきたいと思います。
- ・今までやってきた理科なのにほとんど忘れていたので、たくさん勉強して行かなければいけないところ。
- ・もっと広く深く知識をつけたい！！

●現職教員

- ・知識の乏しさ（特に地層）
- ・理科で指導すべき自然事象や概念知識について理解が乏しいこと。
- ・授業展開（組み立て）等、授業のつくり方。
- ・受講時間をいかに生み出すか。

◆今回の講座について感想、ご意見、今後に向けてなど、ご自由にご記入ください。（事後）

●支援員

- ・回数、期日、時間帯はとても良かったと思う。
- ・とても良かったです。時間帯をもう少し早くしても良かったように思います。

- ・一年間頑張ってよかったですー！！
- ・すべて調度良かったです。ありがとうございました。
- ・特になし。
- ・忘れていた内容も多く、改めて学ぶことができて良かった。
- ・教師の方も確実に参加できるよう長期休業に実施したほうが多くの人に参加していただけるの
かもしれません。
- ・とても楽しく興味深く受講させて頂きました。無料というのも驚きの内容でした。
- ・毎回得ることが多く充実した講座でした。自分の中での興味が増すと共に不安も少し減りました。

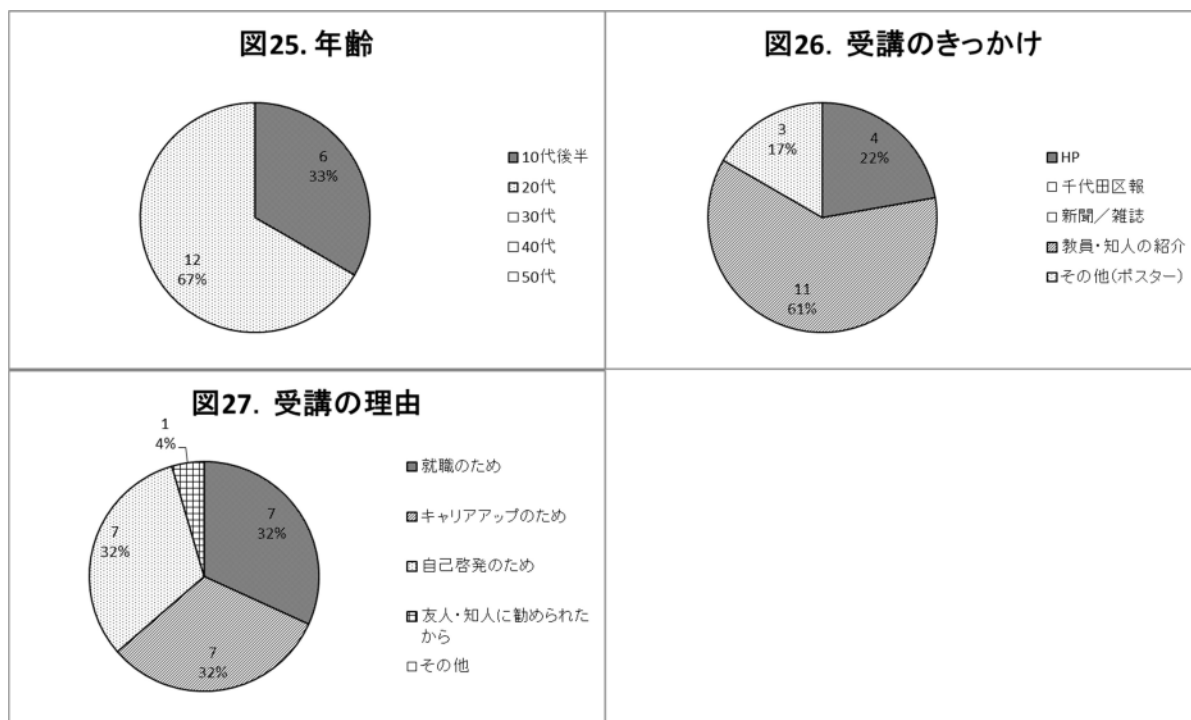
●現職教員

- ・夏休み、冬休みなどに回数が多いと行きやすいと思いました。
- ・2/16の「ものの燃え方」の内容が良かった。児童と同じように教材に触れることが必要→授業
のイメージももてる。
- ・先生の話がわかりやすくとても勉強になった。回数・期日・時間帯等充実。
- ・ありがとうございました。

(3) 野外活動支援員育成プログラム

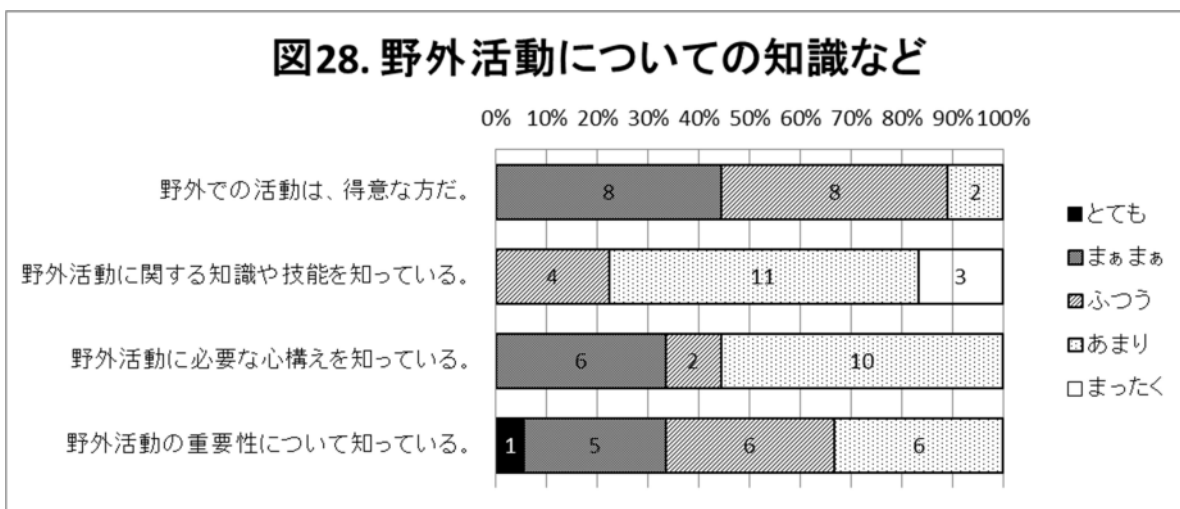
①受講前アンケート

受講前アンケートは、受講者18名中18名全員が回答した（回収率100%）。
受講生は全員女子大学生（短大生含む）であり、年齢は10代～20代であった（図25）。受講の
きっかけは、特別支援教育支援員育成プログラムや理科支援員育成プログラムと同様、「教員・知
人の紹介」が60%以上と一番大きく、次に「HP（ホームページ）」や「その他（ポスター）」が
続いた（図26）。



受講理由としては、「キャリアアップのため」「自己啓発のため」に並んで「就職のため」を選んだ人が約3割いた（図27）ことが特徴的であった。受講対象が、「教員免許や保育士資格を取得して現場に立つ学生」であったことから、就職を視野に入れた自己研鑽の場として期待されていることがわかった。

受講前アンケートでは、野外活動を「ふつう」もしくは「まあまあ」得意とする学生は約9割であり、野外活動の重要性についても「ふつう」もしくは「とても」「まあまあ」知っている受講生も6割強を占めていたが、技術や技能を「とても」知っている、あるいは「まあまあ」知っていると答える受講生はおらず、「まったく知らない」「あまり知らない」と回答する受講生が約78%であった。さらに、野外活動に必要な心構えを「とても」知っている、あるいは「まあまあ」知っているとする受講生は、全体の約3割であり（図28）、興味関心が強い割には、野外活動に関する具体的な知識は乏しいという自覚がある実態が浮かび上がった。



「今回、講座を受けようと思った動機をお聞かせください。」「今、野外活動の支援をする際に、課題となっている点をお聞かせください。」「今回の講座について希望することなど、ご自由にお書きください。」の質問に対しては、自由記述で回答が求められ、それぞれ以下の通り回答が得られた。

<今回、講座を受けようと思った動機をお聞かせください。>

- ・今回のようなボランティアは珍しく、とても楽しそうだったから。子どもが好きだから。
- ・子どもと触れ合い、楽しく野外活動をすることで学べると思うから。
- ・将来、保育園に努めたいと思っているので、今回の講座を生かしていきたいと思った。
- ・将来のためになると思ったから。
- ・経験したことのないことをやってみようと思ったため。純粋に面白そうだったため。
- ・ボランティアに興味があり、子どもと遊ぶことが好きだから。
- ・野外活動は好きだし、将来子どもたちと野外活動を行うとき、何か役に立ちたいと思った。
- ・将来子どもに関わる仕事に就きたいと思っているので、今回の講座を受けて知識を増やしたいと思ったから。
- ・子どもに関わる仕事がしたいと思っており、子どもと触れ合える機会を増やしたいと思ったから。
- ・子供たちとかかわれる事がしくて受けようと思いました。

- ・知識や技能を身につけたいし、日常生活でも“考え方”などを活かしたいから。
- ・子供に興味があり、今度の人生の教養にしたいと思ったからです。
- ・将来のため。
- ・普段の生活ではなかなか身につけることができないことなので、この機会に野外活動の知識や技能を身につけたいと思ったため。
- ・将来に繋がると思ったのと、自分の能力、知識向上のため。
- ・野外活動に関する知識や技能を知らないし、あまり野外活動に積極的に参加したこともないので学びたいと思った。
- ・もともと野外活動に興味があり、機会があれば参加したいと思っていた。また、教師になった後、親になった時にも役立ちそうだった。
- ・将来につながると思ったから。

<今、野外活動の支援をする際に、課題となっている点をお聞かせください。>

- ・野外活動での知識が全く無いのでしっかり身につけたい。
- ・あまり野外活動に関する知識がないので、これからしっかり学びたい。
- ・野外活動の支援をする時に何が必要なのか。
- ・野外活動の知識がないため、何をしたら良いのか判断ができないところ。
- ・安全面に気を付けること。野外活動の知識がないので、知識を身につけたい。
- ・子どもの安全面に対する配慮。
- ・野外活動のことをあまり知らないので、知ることが課題。
- ・小学生や幼児と野外活動を行うにあたって安全に野外活動をすることが課題と思います。
- ・野外活動の必要性。
- ・野外活動に関する知識や技能があまりないので、しっかり勉強していきたいです。
- ・野外活動で子どもと接するとき注意する点。
- ・野外活動の知識がないので、今回の活動や講座でしっかり学びたい。
- ・今回の講座を通じて、考えていきたいと思います。
- ・自分でどこまでできるようになれるか（キャンプの準備、遊び、安全管理）。
- ・野外活動に関する知識（重要性も含む）を詳しく知らないこと。

<今回の講座について希望することなど、ご自由にお書きください。>

- ・野外だとけがをすることが多いと思うので、その時の対処法などを詳しく知りたいです。
- ・野外活動で何が大切なのか、たくさん学んでいきたい。
- ・野外活動の重要性を自身で体験したいです。
- ・育成プログラムが終わったら、たくさん子どもと触れ合いたいです。
- ・体験型だと学びやすい。

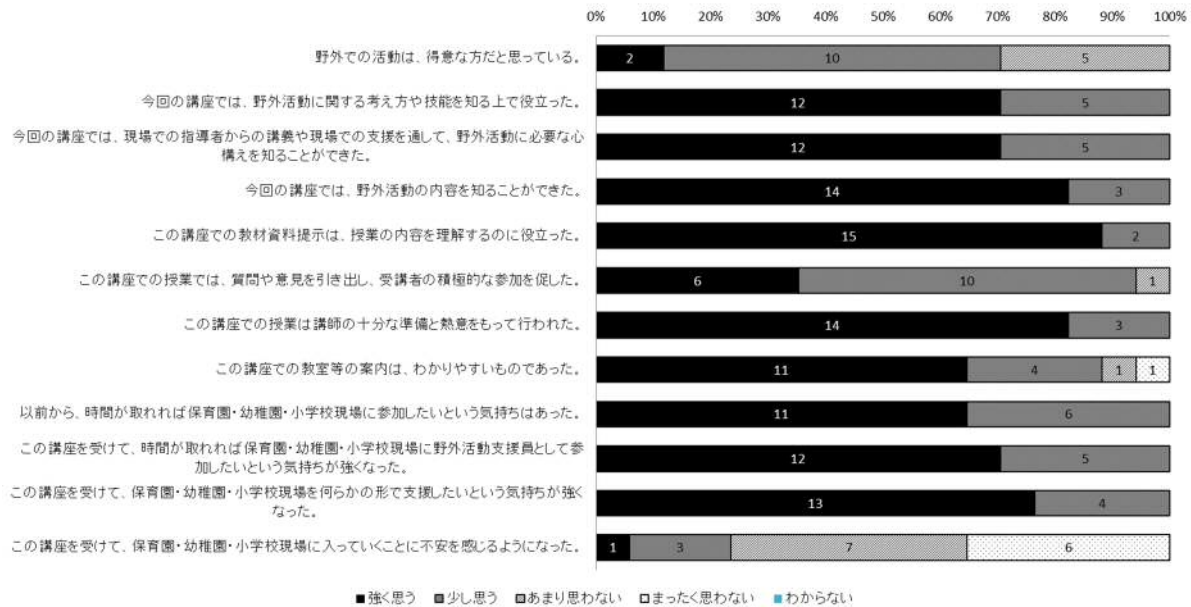
②受講後アンケート

受講者 18 名のうち、受講後アンケートは 17 名から回収された（回収率約 94%）。

図 29 のとおり、受講者からのプログラム評価は、多くの項目で約 9 割以上が「強く思う」「少

し思う」となっており、受講者に満足の行く内容のプログラムを提供できたことがわかる。さらに、「この講座を受けて、保育園・幼稚園・小学校現場に入っていくことに不安を感じるようになった」という質問項目については、8割弱の受講生が「あまり思わない」「まったく思わない」と回答しており、本プログラムで得られた知識が、今後現場に入った時の心の糧になっていることが推察された。

図29. 受講者のプログラム評価と受講者の気持ち



また、65%の受講者は本プログラムを人に勧めたいと回答している（図30）一方、「有料講座だったら受講していた？」の質問に対しては、82%が「わからない」と回答しており（図32）、妥当だと思う受講料についても「500円」や「2,000円」という回答多く（図31）、安定した収入のない学生が受講対象者であるという本プログラムの特徴が現れていたように思われた。

図30. 本プログラムを人に勧めたい？

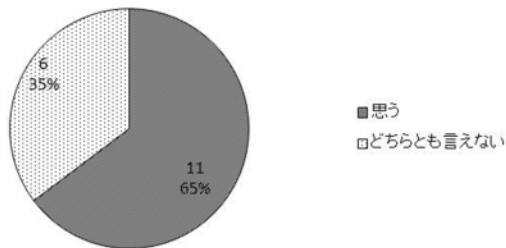


図31. 受講料はどれくらいが妥当？

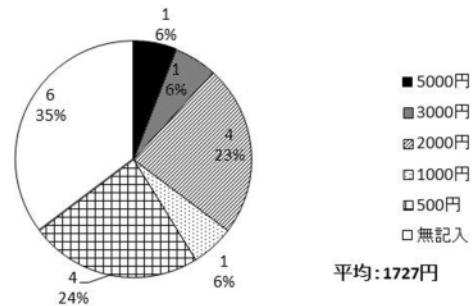
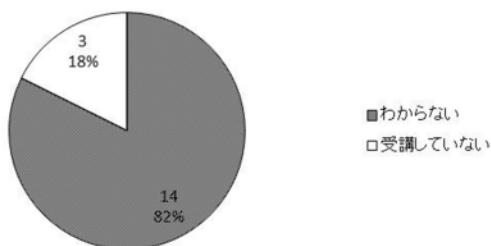


図32. 有料講座だったら受講してた？



「今回、講座を受けて良かった点はどのようなところですか?」「今回、講座を受けてみて、あなたにとって課題となった点はどのようなところですか?」「今回の講座について感想、ご意見、今後に向けてなど、ご自由にご記入下さい。」の3つの質問項目については、自由記述で回答が求められ、以下の通り回答が得られた。

<今回、講座を受けて良かった点はどのようなところですか?>

- ・怪我等の手当ての仕方を学べたこと、北の丸公園で自然の音を感じたこと。
- ・野外活動についての知識がついたところ。
- ・応急処置の方法や、野外での調理の方法など、今後活かせる事を多く学べた所。
- ・実際に幼稚園に行けたので体験できて良かった。
- ・怪我等などの対応の内容は日常生活でも役に立つと思いました。
- ・実際に野外の宿泊行事を行った点。
- ・安全を守ることが第一だということを再確認できたこと。
- ・実際に体験してみる講義が多く、学びが深まった。
- ・子どもたちの考え方や新たな一面を見ることができました。
- ・野外活動について知ることが出来た。
- ・講師の先生の話が、一方的ではなかった所（学生の意見を引き出す形）。
- ・保育園への就職活動を始める前に、保育園の様子について色々知れたこと。
- ・自分で実際に体験することがあったところ。
- ・野外活動について知ることができた。
- ・小学生以下の子どもの接し方がわかった。
- ・教室内だけでの取り組みだけでなく、実践があった点。

<今回、講座を受けてみて、あなたにとって課題となった点はどのようなところですか?>

- ・危険な動植物、虫についての知識をつけること。
- ・植物、虫、動物についての知識をつけること。
- ・野外活動をする上で必要不可欠な危険な虫について、もっと知っておくべきだと思った。
- ・野外活動の時に、もと自分から積極的に動けば良かったと思った。
- ・もっと広い視野を持って活動に取り組む必要がある。
- ・年齢とともに子供ができることを把握する点。
- ・実際に子どもに今回学んだことをいかして関わることができるか。
- ・大人が考えもしないことを子どもは考えているので、子どもたちの目線に立つことが大切ということ。
- ・野外活動をする時の安全管理についてもっと知りたかった。
- ・救急手当の方法などを実践（現場）に活かすこと。
- ・野外活動をしたいと思う気持ちはあるが、積極亭に行動ができないこと。
- ・積極的に、自分から子供達と接する。受け身にならない。
- ・植物や虫の危険性をもっと理解する必要があると感じた。
- ・知識は増えたけど、実際ちゃんと行動に移せるようにしたい。
- ・子どもの予想ができない危険な行為への対処対応。

<今回の講座について感想、ご意見、今後に向けてなど、ご自由にご記入下さい。>

- ・メールアドレスの間違いが訂正されず、メールが届かなかったのが不便だった。
- ・回数や時間帯は、授業とかぶらなかつたので良いと思います。
- ・回数も、内容もちょうど良いと思った。良い体験になった。
- ・実践してみる機会が多くあり、意欲的に取り組めた。
- ・野外活動について知ることができてよかったです。
- ・(土)の空き時間に講座があつて良かったです。
- ・講座の時間帯が遅めの時間で大変だったが、有意義な講座だったなと思います。
- ・授業とは違う緊張感があり、よかったです。
- ・とても勉強になりました。
- ・全部受講することができなかつたので、全部受けたかつたです。
- ・自分の将来に、とても役立つ講義でした。別の機会でもまたこのような講座を受けたいです。

7 事業評価 (外部評価)

平成23年3月5日(火)14時より、本事業の運営・管理、プログラム内容、受講生の現場での貢献度、地域への貢献度など全体的な事業評価を行った。

外部評価委員からあがつた評価内容は以下の通りである。

(1) 事業の運営

外部評価委員の先生方から下記のようなご意見を頂いた。

- ・受講者のニーズやレベルを考慮して受講人数を決定したほうが良いのではないかな。
- ・受講料は満足度や情報に合わせて額を決定したほうが良いのではないかな。
- ・各プログラム同士で共通する課題にどう取り組むかという課題がある。

(2) 特別支援教育支援員育成プログラム：太田俊己氏 (植松学園大学 教授)

学生と外部の方で2層で分かれると思ったが、アンケート結果を見ると、両方のニーズに合っており、両方の層に満足の度合いが高いプログラムだったと思う。大学でやっていることもあり、受講者のニーズを掘り起こし型のプログラムをやっている良さだと思う。

支援員と担任の関係性を上げたプログラムはあまりなく、支援員が苦勞をしている課題でもあるので、ニーズをうまく掘り起こしたあたりが好評だったのではないかな。

支援員が抱く課題は、その子の問題をどう解決していくかという事例性である。それを共有するための別のプログラムを起こすかどうかが課題である。現場は抱えている問題を出すところがないので、こういう場の中でうまく解消して、層状のニーズを満足させていただけるといいように思う。

(3) 理科支援員育成プログラム：角屋重樹氏 (国立教育政策研究所 基礎研究部長)

受講後のアンケートから、学生からも現職の方からも良い評価なので、事業は成功している。

一方、16回の講座をやるということは、やる方がすごく大変であり、受講生もだんだん減っていったという事実がある。観察実験の技能のベーシックな内容に戻って、回数を減らしても良いのではないか。

また、野外と共通する安全教育は大切であり、野外と連携しながらやってみることもいいのではないか。

(4) 野外活動支援員育成プログラム：高橋昇氏（原釜幼稚園 園長）

体験型のプログラムであることが学生には有効であり、自由記述からも、プログラムを通して感性が養われる内容だったことがわかる。

一方、野外活動としての知識と、支援員として子供と関わる心構えという点は不十分であった可能性があり、小さい子供との関わり方や安全管理の面など、人として基礎的な知識が必要なのではないか。野外活動での安全管理としての的を絞ったほうが不安がなくなるのではないだろうか。

また、野外活動の素晴らしさをそれを苦手とする子どもたちにどう伝えるかという課題がある。

実践が多く取り入れられたということは事後のアンケートからも感じられるので、充実した内容だったのではないだろうか。

8 本事業のまとめ（内部評価）

（1）特別支援教育支援員育成プログラム

<参加者の募集について>

本年度は、募集対象を千代田区を中心とし、隣接している文京区、港区、新宿区、中央区からも希望がある場合には受け入れた。また一般の人だけでなく、大妻女子大学の学生も、授業の合間に支援員としてお手伝いできる可能性があるので、募集対象とした。

本年度も昨年と同じように5月の募集であったために希望者は少ないのではないかと危惧したが、このように募集範囲や対象を広げたために、募集開始が遅かったにもかかわらず、59名（学生は18名）という人たちが応募してくれた。2名が途中で辞退したために、最終的な受講者は57名であった。

<プログラム内容について>

前年度に指摘された、支援員はあくまでも担任の指示を受けて行動することが基本ということ、今年度は参加者に明確に理解してもらうために、千代田区の担当指導主事に明快に説明していただいた。そのために支援員と担任の関係性がわかりやすくなった。

また昨年度の評価に、もっと実際の実践現場にふれるとよいという指摘がなされていた。しかし実際の支援場面を見せていただくことは困難である。そこで今年度の研修内容は、実際に幼稚園や小学校の現場で支援員をしている人たちに、実際の経験談を中心にして具体的な実践の話をたくさんしてもらうことにした。

なお一方的な講義形式の研修は避けたいので、講師が60分から80分程度話した後に、残りの40分程度はグループに分かれてカンファレンスを実施した。昨年度も好評であったグループ

カンファレンスを実施することで、学生も一般の人や社会人の話を聞きながら、真剣に話し合いに参加できていたことが、とても印象的であった。

<講師について>

今年度は、現場の幼稚園や小学校での担任経験者を4名、現場の幼稚園や小学校での支援員経験者を2名というように、実践経験の豊かな方に講師になっていただいた。

それによって、これまでは理論的な説明に終始しがちであった支援の内容を、具体的な実践と絡めて様々な角度から話していただくことができ、学生も含めて充実した研修になったといえる。

<実施時期と開催日時について>

今年度も昨年同様、土曜日の午後に研修時間を設定した。そのために日程的に参加が難しくなった方もおられたが、これは今後の検討課題である。時間的には、午後2時から4時までという時間帯は、参加者からはおおむね好評であった。

なお一部の学生が、実習と重なり欠席をしたため、その回の研修内容をビデオにて補講した。

(2) 理科支援員育成プログラム

<ねらいにもとづく企画について>

千代田区内の小学校は、若手教員が増加している。また、現職の教員の中にも理科に苦手意識が強い傾向が見える。以上のような学校現場のニーズに基づいた研修会を企画した。また、理科支援員養成に関しては、千代田区が理科支援員を学校現場に配置する限りは養成を行う必要があると考え、理科支援員養成研修を企画した。さらに、19年度から行ってきた理科支援員養成においては、現職教員対象の研修も同時並行的に行ってきた。その際に、現職教員と理科支援員を希望する人と合同で研修することにより、理科支援員を希望する人が学校現場を知る機会となるだけでなく、学校現場の教員も理科支援員をいかに学校現場で動かすかを考えるよい機会となっていた。そこで、22、23年度に引き続き今年度も、本趣旨に従って研修員の募集を行い、研修の企画を行うことにした。

<日程の組み方>

今年度の研修においても、千代田区で採用している理科の教科書の年間指導計画に従って、授業実施2から3か月前の内容を行うように研修計画を組んだ。また、現職教員に関しては、研修員が希望する研修内容を選択的に研修を受けることができるようにした。ただし、理科支援員養成として研修に参加した方に関しては、全研修に参加することにした。

<事業内容>

理科支援員を将来希望する人（24年度は学生と社会人並びに現職の理科支援員が参加）と小学校教員を対象にした研修会であるが、現職教員の研修を優先して、研修内容を計画した。具体的には、平成24年理科研修プログラムに載せたように計画した。この計画では、前述したように各小学校の授業内容を先取りする形で企画をしている。そこで、研修開始の6月には夏季休業の直

前に行う学習内容を取り上げ、続いて小学校夏季休業期間には、小学校の9月～10月頃の学習内容に関する研修を行うようにした。また、それ以後の研修会は、各小学校の学習内容を2から3ヶ月先取りして行うようにした。そこで、活動計画表のように、開催日時とともに、開催内容並びにその内容が各小学校のいつごろ授業実施となるかを併記するようにした。また、本研修会の後半は、次年度の1学期の学習内容を扱うようにし、次年度の1学期の学習内容に対応できるようにした。このことにより、全14回で小学校の理科の学習内容のおおよそを網羅できるようにした。また、現職教員が選択的に参加しやすいように、中学年と高学年の内容に分けて予定を組むようにした。

本研修であげた内容は、計画をした石井が、経験的に教師自身がつまづきやすいと想定できた内容を優先している。

研修の中身としては、観察・実験の技能が中心であるが、以下の点を考慮して研修を行っていった。

- ①取り上げた観察・実験を行う意味を子どもが主体的に問題解決を行う上で、子どもが、子ども自身のどのような考えを確かめるために行うのかを明らかにする。
- ②この観察・実験を行う中でどのような技能を子どもが獲得していくのか。
- ③観察・実験の手順で操作を行っていく。
- ④安全上の配慮点を熟知してもらうように、実習を交えながら行っていく。

これだけの内容をそれぞれの観察・実験で操作を行いながら実施したために、多くの時間を必要とした。今後時間の取り方、内容の精選を検討していく必要がある。

安全指導を必要とする内容の実技研修には、多くの時間を割く必要があるので最重点内容とした。

回数も自ずと多くなり参加者の負担も大きい。外部評価の中でもコアの技能を研修するなどして、内容の精選が求められるとの意見をいただいた。25年度以降の計画を作成する中で検討していきたい。

<場所、設備>

多くの回を、本学の絵画室で行った。25年度は大学の実験室等を活用して、現職の研修もできる体制を検討していきたい。

<総括>

理科研修を企画した立場から評価委員、受講者のアンケートから言っても内容、時期は、おおむねよかったと考える。

前述したように、回数の多さなどから考えても内容の精選が求められる。精選の視点としては、以下の点が考えられる。

①観察・実験技能について

ア 計測器具の操作

電気、体積に関するもの、重さに関するもの、気体の成分に関するもの、

イ 水溶液などの薬品を扱う操作

ウ 加熱器具に関する操作

エ 顕微鏡などの観察器具を扱った操作

オ 野外活動に関する実習

カ 天体に関する実習

②授業展開について

問題解決の過程を取り上げた授業づくりについてとそのための支援

ア 中学年

イ 高学年

③ 安全指導について

④ 理科室経営について

<今後の可能性>

小学校理科教育が抱える課題をもとに、①理科支援員の将来性、②小学校理科の現状の2点から今後の研修のあり方の検討をしていきたい。

①理科支援員の将来性

平成21年度末に行われた政府の事業仕分けの対象としてあがった。しかし、再度復活し国の予算化が行われる。また、「小学校理科支援員」であるが、小学校現場の実状を考えると必要不可欠であると言える。特に千代田区教育委員会は独自の予算を立てて理科支援員の配置を続けている。それらを踏まえても、本学が地域の千代田区にはたす大切な役割の一つといえる。また、小学校教員を目指す本学科の学生にとっても理科が得意な小学校教員として卒業できることは大きな意味をもつと考える。東京都は、重点施策に理科教育の充実をあげており、それにも答えることができるとも言える。

②小学校理科の現状

小学校の職場内の多忙化と教員構成年齢の低年齢化により、校内での研修システムが機能しなくなっている現状もある。そこで、大学などの機関がそれを支えることも求められる。そこで、卒業生も含めた現職教員の研修の場としての機能を持たせることができる場の一つとして本研修システムが生かせる可能性が高い。

<25年度に向けて>

以上を踏まえて、25年度は以下のような点から理科支援員育成並びに現職小学校教員の研修会を計画していく。

①実施回数を10回程度にする

②前期と夏季休業中に多くの回をこなすようにしていく

③募集は、本学学生（家政学部、社会情報学部の学生には応募の声かけ行う）、その他の学生、理科支援員を希望する社会人、都内ならびに近隣の県の現職小学校教員を対象とする。声かけは、ホームページの活用並びに口コミで広めていく。千代田区内の小学校にはチラシなどを配付する。

④実施場所 室内は、大学実験室(被服あるいは食物学科の実験室)を使いたい。25、26年度は、これまで使ってきた絵画教室が使用不可になる。フィールドワークは、北の丸公園と生田緑地公園を活用する。

(3) 野外活動支援員育成プログラム

今年度は、昨年度の反省事項として、実際にボランティア活動などで子ども達と野外活動が出来る様にする為に、キャンプなどが多く実施される7月頃までにはプログラムが終了するように実施した。結果としては、受講者のアンケート結果でもわかる様に、充実したプログラムが出来たように思う。ただ、ボランティア活動の依頼（保育園・幼稚園・小学校）が平日に多く、受講者が学生だったこともあり授業の関係で参加出来ないことも多く、全体としてこのプログラムで学んだ成果を発揮する機会がやや少なかったように思う。また、実際にボランティアに参加出来ても、体験に対する十分な振り返り（フォローアップ）をする時間が取れなかったことも反省点としてあげられる。

以上の様に、来年度は講習後のボランティア活動の方法や、体験後のフォローアップが充実する様な対策を講じると共に、外部評価にもあった、支援員として子どもと関わる為の心構えや、子どもの特徴にあわせた安全管理、そして、野外に関わる人として基礎的な知識（意識やマナー等）も含めた内容のプログラムづくりを検討したいと考える。

2 おわりに

本年度も無事に報告書を出すことができましたこと、関係者の皆さまのご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

今年度は、所長の交替があり、慣れない中での研究活動でしたので、関係者の皆様には大いなるご支援をいただかなければ、3月を迎えることができなかつたと思います。前所長の柴崎正行先生には、所長時代と同じくらいの、いえ、それ以上の仕事量であつたのではないかと反省いたしております。特に千代田学に関しては、3年目を迎えプログラムも成熟度を増し、高度になっていく中でしたので柴崎先生のお力添えは大変心強くありました。

また、理科支援員育成プログラムの責任者の石井雅幸先生、野外活動支援員育成プログラムの責任者の川之上豊先生は、お忙しい中を本プログラムの準備や実践に相当の時間を費やして、何から何まで手際よくプログラムを遂行してくださいました。そのような献身的ともいえるプログラム遂行に対する態度は、受講者の受講態度にも影響を与えたと思います。

今年度の外部評価委員の先生が「講座は緊張の連続」というような受講者のコメントを取り上げて、「本当は授業もこうでなければならぬ」と言われました。そして「支援員育成講座」のプログラムのあり方から、大学での授業のあり方への提案もできるのではないかとコメントされました。

本プログラムの評価のみに意識が集中し、視野が狭くなっているときのご発言でしたので大いなる気づきを経験いたしました。現在の学生気質を考えた時に、理論と実際が講義の中で循環するという一般論としては決して新しくない発想ですが、そのことの意味が実感を持って迫ってきました。本当に緊張し心揺さぶられた瞬間でした。

最後になりましたが、本プログラムを千代田学として展開するのは今年度が最後です。来年度からは、教育支援員育成プログラムを千代田学としてではなく、児童臨床研究センターの事業として展開することになりました。

これは、本プログラムの成長にご尽力くださいました、本プログラムに関わってくださった関係者の皆さまのおかげでございます。特に外部評価委員の皆さまの厳しく温かい評価によるところが大きいと思います。その評価がプログラムの責任者・担当者のプログラム改善・遂行に向かわせ、受講者の熱意になって表れたのが本年度だったと思います。そして、それらの努力を大学が認めてくださったのだと思います。大学の関係の皆さまにも厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 3 月末日

大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター
所長 阿部 和子

平成 24 年度
千代田区委託 千代田学
「千代田区における教育支援員の育成に関する実践研究」
成果報告書

平成 25 年 3 月 31 日発行

発行者： 大妻女子大学家政学部児童臨床研究センター
〒102-8357 東京都千代田区三番町 12
TEL: 03-5275-6129 FAX: 03-5275-5252
E-mail: jirinken@ml.otsuma.ac.jp
HP: <http://www.home.otsuma.ac.jp/center/>